

論文以外のコンテンツ

雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 別冊
号	2
発行年	2008-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005242/



「エコ・フィロソフィ」研究 第2号
別冊

シンポジウム・講演会 編

Eco-Philosophy

Vol. 2 - Extra

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ 2008年3月

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University, March, 2008

Eco-Philosophy

Vol. 2-Extra



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

目次

第 1 編 国際シンポジウム

I. 地球環境とアジアの価値観—われわれは未来世代を守れるのか—

企画者： 大島 尚、今井 芳昭
司会者： 田中 淳
話題提供者： 村田 佳壽子、大島 尚、鄭 全全、Victor Savage
指定討論者： 鄭 躍軍

．．．．．7

II. 今、地球を維持する哲学とは？ —エコ・フィロソフィを求めて—

1. 【基調講演】「2050 年までの地球の課題」 吉川 弘之 ．．．．．43
2. 【パネルディスカッション】
 1. 「科学の自然観と倫理」伊東 俊太郎 ．．．．．71
 2. 「キリスト教の自然観と倫理」間瀬 啓允 ．．．．．75
 3. 「仏教の自然観と倫理」デレアヌ フロリン ．．．．．81
 4. 「アメリカ思想の自然観と倫理」ウイリアム・ボディフォード ．．．．．87
 5. 「日本思想の自然観と倫理」竹村 牧男 ．．．．．97
3. 【総合討論】 今、地球を維持する哲学とは？ —エコ・フィロソフィを求めて—
．．．．．105

第 2 編 招待講演会

環境配慮行動を促す説得的コミュニケーション

Using persuasive communications to protect the environment

Robert B. Cialdini

．．．．．117

第3編 国際セミナー

〈IR3S プロジェクト〉東洋大学 TIEPh・茨城大学 ICAS 共催国際セミナー
「持続可能な発展と自然・人間—西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィを求めて」

第1部 自然といのちへのまなざし—思想的・理論的アプローチ—

1. 「自然の聖性と自己の問題」 竹村 牧男 139
2. 「仏教スピリチャリティにおける自然のはたらき」 ケネス 田中 143
3. 「精神的持続可能性—伝統と現代」 ジェフリー・クラーク 147
4. 「内なる自然と外なる自然」 小坂 国継 153

第2部 自然の癒し・人間の癒し—心理学的・実践的アプローチ—

1. 「生命の全一性の回復と持続可能な開発」 中川 光弘 157
2. 「コスモロジー・エコロジー・持続可能な社会」 岡野 守也 167
3. “Strategy and Capacity: Humans, Sustainability, and Climate” Gregg Suhler 171
4. 「持続可能性に向けたこころの汚染とセルフヘルプ教育循環論」 菅沼 憲治 177

国際シンポジウム

地球環境とアジアの価値観

ーわれわれは未来世代を守れるのかー

国際シンポジウム

地球環境とアジアの価値観－われわれは未来世代を守るのか－

主催：

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

日本心理学会第71回大会準備委員会

企画者：

大島 尚（東洋大学）

今井芳昭（東洋大学）

司会者：

田中 淳（東洋大学）

話題提供者：

村田佳壽子（（社）環境科学会理事・環境ジャーナリスト）

大島 尚（東洋大学）

鄭 全全（浙江大学）

Victor Savage（国立シンガポール大学）

指定討論者：

鄭 躍軍（総合地球環境学研究所）

2007年9月20日（木）10:00～12:00

東洋大学井上円了ホール

（鄭全全氏と Victor Savage 氏は英語でスピーチをされており、本稿では同時通訳による日本語をもとに記録した。）



● 田中淳氏

おはようございます。これから「地球環境とアジアの価値観—われわれは未来世代を守れるのか—」というタイトルでシンポジウムを開始させていただきます。あまり多くの方々が会場にいらっしやいませんが、これは別に日本人が環境に関心を持っていないという証拠ではありません。

それでは、セッションの予定を紹介させていただきます。私は司会を担当いたします、田中淳と申します。これから4人の話題提供者の方々に20分ずつご報告をいただいて、その後お一人に指定討論者としてお話しいただきます。それが終わりましたら、各スピーカーから他の先生方に対するコメントをいただきたいと思います。

最初に、このシンポジウムを企画いたしました、東洋大学・大島教授より、このシンポジウムの企画の趣旨とパネリストの紹介をしていただきます。大島先生、よろしくお願いいたします。



● 大島尚氏

ご紹介をいただきました、東洋大学の大島と申します。

地球温暖化を代表とするような地球環境問題というのは、21世紀最大の問題とされていまして、特に学際的なアプローチが必要だということが盛んに言われています。例えば、自然科学の分野ではさまざまな新しい環境技術が進歩していたり、あるいは経済学の分野では排出権取引というような試みを実際になされているわけです。ただ、環境問題を引き起こしているのは人間の生活でありまして、人間が起こしている問題であることが明らか

なわけです。そうであるならば、人間の心を扱う心理学という分野も無関係ではないはずです。そこで今回は、地球環境問題に心理学がどのように関わることが出来るかを考えたいということで、シンポジウムを企画いたしました。

これまで産業革命以降、特に西欧諸国で科学技術の進歩とともに環境がどんどん汚染されてきたわけですが、今、アジアが同様に経済的な成長をしております、そのことがこれからの地球環境に対して、必ず大きな影響を及ぼすだろうと言われています。そこで、このシンポジウムで



は、まずアジアという視点を取り入れてみて、アジアの人々の考え方を理解した上で、今後の環境問題をどう扱えばよいかを考える手がかりを得たいということが、1つの目的であります。

それから、もう1つは、この環境問題というのは、未来世代、我々の後の世代に関わる問題でして、国連のブルントラント委員会というところが、「未来世代が自らのニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすこと」という言葉によって「持続可能な発展」という概念を提案したわけです。そういう意味では、環境問題というのは、我々の世代にとどまらない問題だというのが、大きな特色になっています。ところが、これまで心理学が扱ってきた環境というのは、どうしても個人の環境、個人を取り巻く環境というところに中心がありました。ですから、地球環境、あるいは自然環境というような大きな視点のものを心理学で扱われることが、ほとんどなかったわけです。非常に苦手な分野だったということが言えるかもしれません。ただ、これからはそういう問題も取り上げていかなければいけないのではないかとということで、それを今回の1つのテーマにしております。

あともう1つ、未来世代というような長い時間スケールの問題も、これまた心理学ではなかなか取り扱ってこなかった問題です。これも、今後どのように扱うべきかということについて考えなければいけないだろうと思っております。

そのような主旨で、今日は特にアジアからということで、中国とシンガポールからスピーカーをお招きしました。それで、いろいろな視点から、心理学がこれからどんな形で環境問題に関われるかの手がかりを得たいと考えております。心理学の中では、なかなかなじみのないテーマですので、実際こういう形でシンポジウムを開いてみたんですが、あまり多くの方のご来席をいただけなかったわけですが、このシンポジウムは全てビデオに記録しておりますので、それをこれから先に皆さんにこの問題を知っていただくために、いろいろな形で使いたいと考えています。

それでは、お話をいただく方々を順番に紹介させていただきますが、最初は村田佳壽子先生です。村田先生は社団法人環境科学会の理事をお務めで、その他にもいろいろな環境問題に関わる肩書きを持っています。環境ジャーナリストの会というものがあるのですが、そこの副会長もなさっていらして、いろいろな形で人々の環境問題に対する意識を理解し、啓発していくような活動をなさっていますので、ぜひ、そういった実践的な活動から見た環境問題と、それから、特に心理学に期待するものというようなところをお話いただければと思っています。

次は私、東洋大学の島ですけれども、今年に入りまして、シンガポール、中国、日本で、環境に関する価値観の調査を行いました。そのデータをもとにしまして、その中から心理学に関わる部分についての問題提起をしたいと考えております。

それから、次が中国の浙江大学の鄭全全先生です。中国語は大変発音が難しいんですが、ジェン・チョワンチョワンというように聞こえます。鄭先生は、中国の心理学を代表する方でして、特に社会心理学の分野のリーダーです。先生は中国の浙江省で調査をなさったそうですので、そのデータをもとに中国における環境問題の現状について、ご紹介いただきたいと考えています。

それから、その隣がヴィクトール・サベージ先生で、国立シンガポール大学の准教授でいらっしゃいます。地理学を専門とされていますが、やはり環境問題に非常に詳しくて、また、環境教育にも熱心に取り組んでおられます。シンガポールは非常に早くから、リ・クアンユー首相などがリーダーシップをとって環境政策に取り組んできたわけですが、その辺りの実情、それから、シンガポールというのは特殊な国家でありまして、いわゆる都市国家なのですね、そういう中での人々の環境に対する意識というものを、ご紹介いただければと考えています。

それから最後に指定討論者ですが、鄭躍軍先生は京都にある総合地球環境学研究所の准教授でいらっしゃいます。鄭先生は、ずいぶん前から環境問題に関して、アジアを中心にアメリカなども含めて調査をやって来られました。そういう多くのデータを持っていらっしゃいますので、環境に関するさまざまな視点から、4人の話題提供を踏まえて指定討論という形でコメントをいただきたいと考えています。

●田中淳氏

ありがとうございました。それでは最初のスピーカーとして、村田佳壽子先生からお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

●村田佳壽子氏

皆様、おはようございます。村田佳壽子です。

今日、この会場にお越しくださった方は、とても数は少ないんですけれども、それだけに、ことのほか環境問題と心理学との関わりに熱心な方たちだと思います。そういう意味では、数は少なくとも、非常に質の高い方たち、その方たちにお話し出来ることをとても嬉しく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、1989年から「環境ジャーナリスト」という仕事を、日本で初めて開始しました。当時アメリカでは、環境ジャーナリストというのが大統領の諮問機関の中にも入り、政府の政策決定にも必ず関与するといわれるぐらいの力を持ち、アメリカの環境ジャーナリストの会には1500人も会員がいたんですが、日本では誰もおりませんでした。同じジャーナリストの人たちからも、「環境に偏って報道するのか、そんなジャーナリストはいない」と言って非難されるほどでした。当時は、日本がまだバブルの絶頂期でしたので、



お金があれば命も買えるかのような風潮でした。そんな中で、環境ジャーナリストという仕事を始めるといことは、大変勇気のいることだったんですが、私は当時、自分が病気をしまして、健康でいるためには、と考えていろいろ調べた結果、地球環境が悪いと決して健康ではいけないんだと、地球の健康が人間の健康なんだということがわかって、自

分自身の問題と考えてこの活動をスタートしたわけです。

私は、1982年に文化放送のアナウンサーとして社会人生活をスタートしました。それからテレビの仕事に来て、経済番組などを担当したりして、ですから日本の経済の状況をその時によく見たんですが、そういったアナウンサーとして元気いっぱいに充実して活動している最中に、健康を害するということになりました。ですから、人間が元気である時には当たり前だと思っている健康な体がある、自分の意思で自分のしたいことができ、体が動くということと同時に、ご飯が食べられるとか、空気が吸えるとか、水が飲めるといったことがあって、人間は初めて生かされているんだなということも強く意識しました。そこで、自分の問題として、というところからスタートしたんですけども、これを世の中の人たちにも何とかして伝えていくということを仕事にしようと思ったんですね。それは、アメリカに環境ジャーナリストという存在があるということを知ったのも1つのきっかけでしたが、私はアナウンサーという仕事をしているのだから、何とかしてこの大変難しい、そしてわかりにくい問題を面白く、わかりやすく、みんなが関心を持つように伝えられるのではないかと考えました。少なくとも普通の人よりは、話術ということには少し長けているはずなので、そのことを生かそうと。

そして、もう1つ。大学の時に、私は専攻が心理学でした。性格心理学、特に異常心理学を専攻していたんですが、正常というものがどういうものであるかを知らなければ、異常というものは分からないので、正常と異常の落差、その間にあるものといったことと個人の性格、それと環境の関わりというものがテーマでした。心理学でいう環境というのは、自分を取り巻く状況というような意味合いが強いですけれども、そうした自分を取り巻く状況、環境というものを、地球環境というものに広げて伝えていくということを、心理学的なアプローチから出来るのではないかという風に思ったわけです。

たった1人で環境ジャーナリストという仕事を始めて、3年目には日本の環境庁の国立環境研究所の客員研究員になっていました。国立環境研究所は、今は独立行政法人になりましたが、その当時から、今でも、世界で温暖化研究に関して、また地球環境問題に関して、右に出る研究機関はないと言われるほどにトップクラスの研究機関です。国連から発表されるアジア太平洋地域のデータは、ほとんど国立環境研究所のものであり、環境研は国連のグリッドといわれる世界の研究拠点11のうちの1つに数えられています。そんなすごいところに私のような人間が客員になるということはそれまでに例がなく、「特に所長が認めた者」という一文を付け加えて国会を通して、そして客員にいただきました。なぜ、そういうことになったのかというと、環境問題を、まず大変重要な問題であり、切迫した緊急の課題であるということ、広く普通の人たちに伝えることが必要だという認識が、当時の環境研の所長をはじめ、研究者の皆さんにあったからなんですね。なぜなら、環境研にどれほどの素晴らしい研究成果があっても、これが有効なものとして、対策として生かされるためには、政府の政策の中に入ることももちろんなんですが、最も数の多い一般の人たちが日常生活の中で行動してくれるということがないと、この成果が生かされないからなんですね。当時、日本の国民は、環境問題ということには全く関心がありませんでした。世界では、特にヨーロッパを中心に、環境問題に関しては大変高い関心があったんですが、日本では全く関心がない。そこで、まず国民の関心と呼び覚ます。そして、

関心を呼び覚ましたら、次に行動を喚起する。行動をしないと、いくら考えていても、わかっていても駄目ですので、いかにして行動を起こさせるか。そのためには、このジャーナリズムというものを有効に使うことが必要だという認識があったわけです。それは、アメリカの環境、特に温暖化研究の権威でありますスティーヴン・シュタイナー博士が、当時書いた「地球温暖化の時代」という論文にそういったことが書かれてありまして、「ジャーナリズムの力は、これからは地球を救うかどうかの分かれ道になるであろう」と。この論文に、そういうことが書いてあったので、なんとか国民に知らせる手段を取ろうということだったわけです。そうしたことから、その93年の10月に環境研の客員になり、国家の研究機関の客員研究員、準国家公務員でありながら、ジャーナリストでもあるという大変珍しい存在として、ずっと活動をしてきました。

その中で、私はすでにラジオからテレビの方に活動の場を移しておりましたので、テレビのコメンテーターですとか、さまざまな番組を通じて人々の関心を引き出すということに尽力をし、一方で、一般の方たち向けの講演をする、あるいは環境教育のミュージカル人形劇を作るといった活動もしてきました。テレビドラマというものが、特にこれまで日本に大きな影響を与えてきたということは皆さんもご存じだと思うんですが、たとえば戦後すぐにアメリカのドラマが、『パパは何でも知っている』というタイトルで日本で放送されました。アメリカ人の生活、冷蔵庫を開けると、お肉やバターやおいしいような食べ物がいっぱい入っていて、そして車に乗り、エアコンをつけ、というような暮らし……。こうした暮らしを見せることで日本人をアメリカナイズしていくということに、アメリカのドラマを使って大変成功しました。そして、三種の神器といわれる、まさにこのドラマの中で頻繁に見せられてきたものが、日本人にとっても憧れの品になり、それらを求めてみんながせっせと働くという状況が戦後すぐに作り出されました。アジアの国々でも、やはり同じようなドラマが放送されたりして、大変効果があったようです。また、古くはラジオの時代に、アルゼンチンのエバ・ペロン、エビータと言われて、後にミュージカルになったりするぐらい有名な女性がおりました。アルゼンチンの将軍の夫人で、この方が元女優であったんですが、ラジオを使って国民の関心を非常に引いて、そしてラジオを通して人々の射幸心を煽っていった。そして政策は、直接彼女が大統領になっていたわけではないんですが、夫人として国民の心を動かすことで、アルゼンチンという国を動かしていったという、実際のお話がありました。こうしたラジオやテレビの影響力の大きさというのは、日本でもやはり大きなものがありまして、日本で最近放送されたドラマの中でも、温暖化を防止するために、みんなが車でなく自転車に乗ってくれるようにしようというので、大変人気のあるドラマの中に、主人公の刑事が、正確には警部補なんですが、事件現場に自転車に乗って現れる。そして、着くと「この自転車いいだろう？セリーヌなんだ、30万もするんだよ」と言って、みんなの関心を引くようにする。これは、実際に日本自転車協会に協力をしていただいて、当時の運輸省がそうしたシーンを作ってはどうかということで、ドラマの中にさりげなく織り込むという形で放送されました。そんな風に、私たちが気が付かなくても、そうしたドラマの中のシーンなどに、私たちの気持ちを動かすような、言ってみれば、サブリミナル的な効果が織り込まれているということもあります。

このドラマには、私は直接には関与していなかったんですが、私が直接関与したもので

大きな効果をあげた実例があります。今、世界遺産に登録されて、誰でも知っている屋久島。91年当時は、日本人でもほとんどの人が知りませんでした。当時、私はテレビ朝日でニュースリポーターをしておりまして、環境ジャーナリストとしての活動の傍ら、警視庁指定118号事件など殺人事件を取材したりしていたんですが、環境庁のエコライフ・フェアの子どもたちを連れての、屋久島のエコツアーというのをこの番組で放送しようという企画を持ちかけまして、そして30分の特番を放送しました。20人の子どもたち、下は7歳から一番大きな子でも15歳の子どもたちが、屋久島へ行って1350mの山の上の縄文杉にたどり着いて、子どもたちがみんなで私と手をつないで、その縄文杉を取り囲むという映像を流しました。テレビというのは、ものの大きさが、それだけを取り上げると分からなくなってしまうんですが、人間とこの縄文杉の大きさ、特に7歳の小さな子どもと縄文杉の大きさというのが大変なインパクトがありまして、まあ心理学的に言うと、人間の情報獲得は80%が視覚からといわれていますので、絶大な効果をあげました。テレビ朝日には、その日放送した番組の中で最も多くの電話、手紙などの反響が寄せられまして、その日のトップの視聴率をあげました。

このことをもって、私は当時の環境庁長官、愛知和男さんに「屋久島をぜひ世界遺産にしたい。国民からこれだけ反響がありました。世界遺産というのは、国民が関心を持って、国民が守っていきますという意味が一番必要なんです。」と言いました。登録されるには、そのことをいかに示すかということが重要だと言われています。富士山が日本の霊峰と言われながら、いまだに世界遺産登録がなされないのは、ゴミだらけになっていて、国民の関心が低いと評価されているからだと言われていることを思えば、屋久島がこれだけ関心を持たれていることは、91年当時は意外にも思われるぐらいのことだったんですね。で、愛知長官が「僕もそう思う。非常に素晴らしい所なので、すぐ世界遺産に登録しよう」と言って、国会に法案を提出いたしました。そして、異例のスピードで、わずか1年半という早さで、屋久島は世界遺産に登録されました。国民が、どれだけ関心を持っているかということを、このテレビという公器を使って、そして、その視覚による効果で動かしたという、一番端的な例かと思います。

私は、こうしたことの他に環境教育人形劇などもやっているんですが、10年前には日中国交正常化25周年記念ということで、中国でも作品を上演しました。そして2005年にはアンデルセン生誕200周年記念ということで、アンデルセンの『人魚姫』をテーマにして、この中に地球環境の要素を取り入れて、これを藤城清治先生という影絵の世界的な巨匠といわれる方をお願いして、ミュージカル影絵劇にしました。そして、それだけではなかなか細かなところまでカバーが出来ませんので、藤城清治先生と私との、環境をテーマにした対談も付けて、そして東京都の北区で上演しました。日本国内では、これが最初の上演だったんですが、北区が「元気環境共生都市宣言」というのをするという、このイベントに合わせて上演をいたしました。多くの反響がありまして、この絵の美しさ、やはり視覚的なことというのが特に関心を引いたようで、このチラシをぜひくれないか、という問い合わせが北区には殺到したといえます。影絵の、本物をもらえなくても、チラシだけでもせめてもらえないかと言われるくらい、大変美しい映像でした。これは、皆様に今日、著作権の問題などがあってお見せ出来ないのが残念なんですが、こうしたやり方

というのを、私は「エコ・エデュテイメント」と名付けています。つまり、エコロジカル・エンターテインメントに、エデュケーションをプラスして面白く楽しく環境教育をする。教育をされているということに相手が気が付いては駄目なので、気が付かないようなやり方で、見終わったらいつの間にか環境に対する意識が高くなり、いつの間にか何か行動をしようとなっていたというような心理作用を起こさせる手法を用いています。

こうしたやり方を、私は環境情報伝達科学と名付けて、社会人入学した大学院では生態系保護論を専攻したんですが、その研究テーマとして、マスメディアによる環境教育として環境情報伝達科学という新しい分野を樹立したいということで、研究をしました。それは心理学的なアプローチ、心理学的な手法と、環境科学とを融合させて、効果的に環境情報を伝達し、意識改革をすることによって行動変革を引き起こすというものです。大事なのは、どう実用化し、どう実効性の高いものにするかということなんですが、人間は誰でも「自分が生きている間は大丈夫だろう」とか「自分は大丈夫だろう」と、なんとなく漠然と、自分は大丈夫だと思っている。地球は危なそうだけれど、自分は大丈夫だろうというような、全く根拠のない、安全化の偏見という心理作用が起こるものです。また、嫌なことからは逃避したいという心理作用も働きますので、これを起こさせないように、言ってみれば、わざと楽しく、わざと明るく、みんながこのエンターテインメントとして環境問題をとらえるようなものに、いかに作り上げていくかということが大事だと思います。

そのためには、必ず最後に希望がある。例えば、私がいつも話をするのは、太陽光、風力、燃料電池、小型水力、この4つは、日本が世界一の技術を持っていて、これをみんなが意識を向けて活用していくような社会のシステムを作っていけば、つまり民度を高めていけば、これが今は宝の持ち腐れになっているけれども、有効活用出来るので、生かされて経済的にも発展する。だから、今はとてもピンチだけれど、とても大きなチャンスの時でもあるんだという話で締めくくるようにしています。必ず、暗い話ではなくて、いい話なんだ、とても実はいいことなんですよ、という希望で話を終えるようにしているんですが、そうした心理的なアプローチというものを使って、希望というところに根ざした行動をしていこうという風に意識を改革していくことが、その未来世代を守っていくと同時に、もうすでに被害に遭っている、現世代の私たちを救うことにもなるという風に思っています。

これから、その心理学をやっている皆さん、それと、私のいるような環境科学会の研究者たちと一緒に協力をして、そして、海にはライフセーバーというのがいますが、あのライフセーバーと同じように、地球を救うアースセーバーのような、心理学と環境科学の科学者によるアースセーバーのようなチームを作って、みんなでこのマスメディアを使って専門知識を広く普及していくと同時に、一般の人たちの、一番数の多い一般の人たちの行動を喚起していくということが出来れば、必ず明るい未来が待っているのではないかなという風に思います。

私が、実際にやっていることをもとにしてお話をしてみました。皆さんは、どのように感じられるでしょうか。聞いていただいて、ありがとうございました。

●田中淳氏

どうもありがとうございます。現場から心理学への期待ということで、その中でも私自身が自分自身の問題とするということ。これは多分、心理学の世界では関与、インボルブメント、あるいはコミットメントという問題なんだと思います。また、意識から行動へということをおっしゃっていました。これは、社会心理学の態度とビヘイビアのギャップの問題として、大きな問題になると思います。

続きまして、大島先生から、お話をいただきたいと思います。

●大島尚氏

先ほど申し上げましたように、今年に入ってから調査を行いました。環境に対する意識調査であります。シンガポールと、中国と、それから日本とで行ってききましたので、その結果の一部を紹介させていただいて問題提起をしたいと考えています。

まずシンガポール調査ですが、サンプルサイズが1037人です。男性500人、女性537人。シンガポールというのは、いわゆる多文化、多民族の国でありまして、調査を行うにあたって4か国語の調査票を用意しました。英語、中国語、マレー語、タミル語です。民族としては、中国系の方が一番多いと伺ったんですけども、実際に調査をやった結果としては、英語で答えた人が一番多かったということです。シンガポールでは英語教育が非常に進んでいると聞いていましたが、これだけ皆さんが英語を使っておられるんだということが分かりました。次に中国調査ですが、これはサンプルを1000人取りました。場所は、上海で500、杭州で300、蘇州で200というように、3地域でとってみました。次に、日本の調査ですが、福岡市で行いました。サンプル数は400で、男性が192人、女性が208人です。いずれの場合も、調査は各家庭を訪問して直接面接をするという方法をとっています。

最初に、まず環境問題に対する意識を聞いた質問に対するデータをご紹介します。「環境の保護は、あなたにとってどのくらい重要な問題ですか」という質問に対して「非常に重要である」、「重要である」、「あまり重要ではない」、「重要ではない」という4件法で答えを求めました。その結果、日本でも、中国でも、シンガポールでも、「重要である」という答えがここまでいっているわけですね。ですから、ほとんどの人が環境問題は重要であると認識しているということが分かりました。ですから、環境問題自体の理解というのは、ほとんどの人が持っているという風に考えられました。次に、危機意識ですね。「環境汚染はあなた自身の健康にどの程度影響を及ぼしていると思いますか」。環境問題における、自分自身の健康に対する危機感というものを聞いてみました。これも「非常に影響がある」、「やや影響がある」、「それほど影響はない」、「影響はない」という4件法です。その結果、やはりかなりの数の人たちが、実際に影響があるという風に答えています。ですから、人々の環境問題に対する危機意識もかなり高いということが分かります。

そこで、そういう環境を守る活動をするかという、行動、意図のようなものを聞きたいと思ひまして、こういう質問を設けました。「地球環境と自分たちの生活との関係について、2つの意見があります。あなたのお気持ちはどちらに近いですか。1番、自分たちの生活が今より不便になっても、地球環境を守るためにひとりひとりが努力するべきだ。2番、

自分たちの生活を、より便利にすることを考えるべきだ。」結果はですね、日本の場合に、地球環境を守るために努力をすべきだというのが非常に高く、90%ぐらいあります。続いて中国はこれぐらいですね。シンガポールは60%弱というところです。この質問が、実は他のいろいろな環境問題に関する意識との関係を見た時に、非常に重要なファクターであることが分かりました。それを次にご紹介していきます。例えば、最初に聞いた「環境の保護は、あなたにとってどのくらい重要な問題ですか」という質問に対する答えを、先ほどの「まず生活を便利にすることを考える」という人と、「地球環境を守るために努力する」と答えた人とで分けて、その重要性の認識の度合いを比較してみました。そうしたところが、このように日本においても中国においても、シンガポールにおいても、「地球環境を守るために努力する」と答えている人というのは、それだけ環境問題が重要だと理解していることが分かります。

それから、環境保護に対する行動意図として「あなたは、値段の高い品物でも環境を守るためなら買おうと思いますか」という質問をしてあります。これに対する答えですが、「すすんで買おうと思う」がこれですね。それから「ある程度は買おうと思う」というのがここまでですね。それから、「どちらともいえない」、「あまり買いたくない」、「買いたくない」というのがこれぐらいです。ですから、かなりの人たちが「ある程度は買おう」、あるいは「すすんで買おう」という風に考えていることが分かります。この結果についても、先ほどのように「生活を便利にすることを考える」か、それとも「地球環境を守るために努力する」と考えるかのどちらと答えたかによって分けてみました。すると、やはり「地球環境を守るために努力するべきだ」と答えた人が「環境を守るためなら買おうと思う」と答える傾向が非常に強く出ていることが分かりました。

次に、経済との関係ですが、「経済発展は常に環境破壊をともなう」という質問にどの程度賛成かというのを尋ねました。その結果、「経済発展は常に環境破壊をともなう」に「賛成」の人がこれぐらいですね。「どちらかといえば賛成」がこれぐらい、「どちらともいえない」、「どちらかといえば反対」、「反対」と、こんな割合になりました。そこで、この答えについても、先ほどの「生活を便利にする」か、それとも「多少、不便になっても環境を守るために努力する」か、という質問に対する答えとの関係を見てみました。そうしたところが、やはり「地球環境を守るために努力する」と答えた人は、どこの国でもですね、経済発展は常に環境破壊を伴うという意見に賛成する傾向が見られました。

次に、自然観を聞いてみました。環境問題を語る上で、しばしばこういう考え方が実際にあるんじゃないかといわれるものです。「たとえ人間によって自然が破壊されたとしても、自然は自らの力で回復できる」。それについて、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば反対」、「反対」という形で聞きました。これが結果ですけれども、「賛成」がこれですね。「どちらかといえば賛成」、「どちらともいえない」、で、「どちらかといえば反対」、「反対」。つまり、自然は自らの力で回復できるということに対して反対だという割合が、特に日本においては非常に高いわけですね。これについても、先ほどと同様に「生活の便利さを求める」か、「環境の保護のために活動する」か、という関係を見たのが次です。「地球環境を守るために努力するべき」と答えた人は、反対の傾向が強いと。日本の場合は、どちらにしても非常に反対の傾向が強いんですけども、中

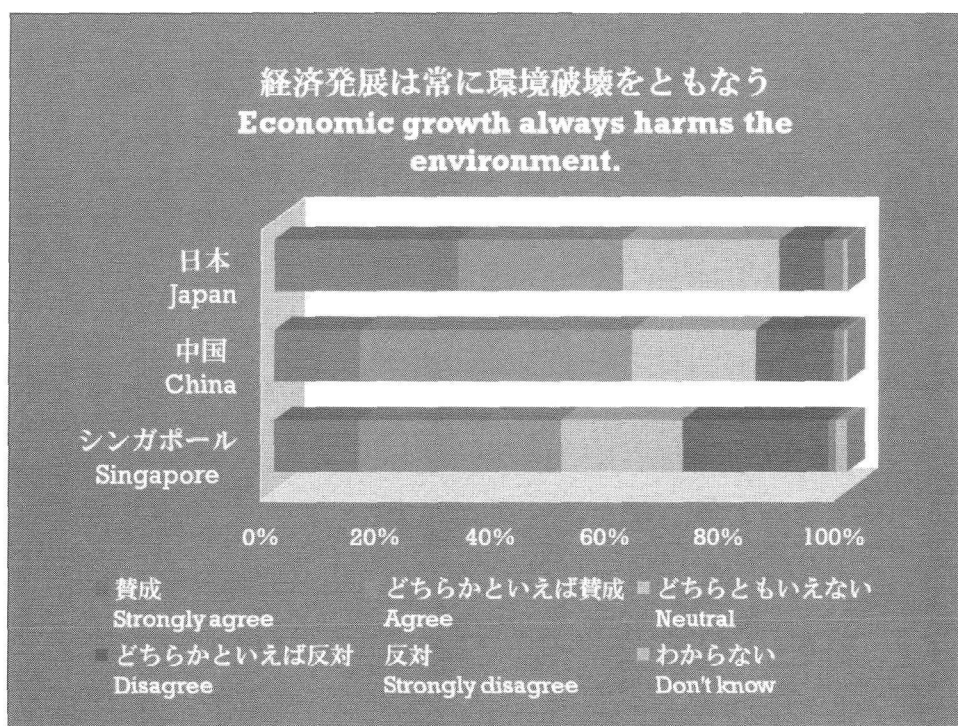
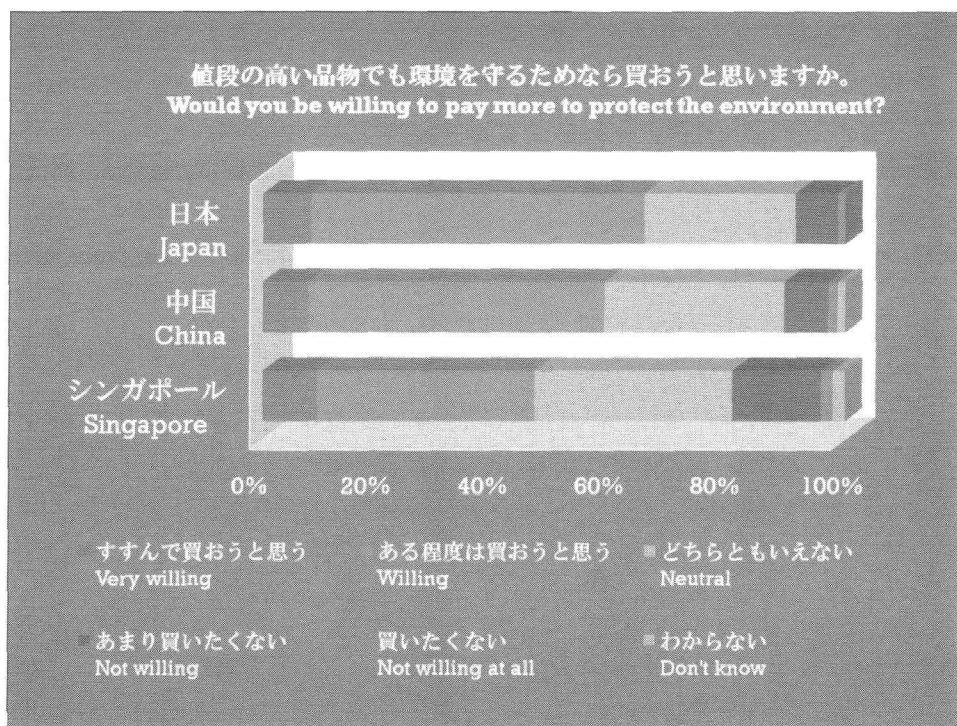
国、シンガポールの場合にはかなり顕著に違いが出ています。「生活を便利にすることを考える」という人は、特にシンガポールではどちらかといえば、「自然は自らの力で回復できる」という考え方に賛成の傾向を示しているということが分かります。

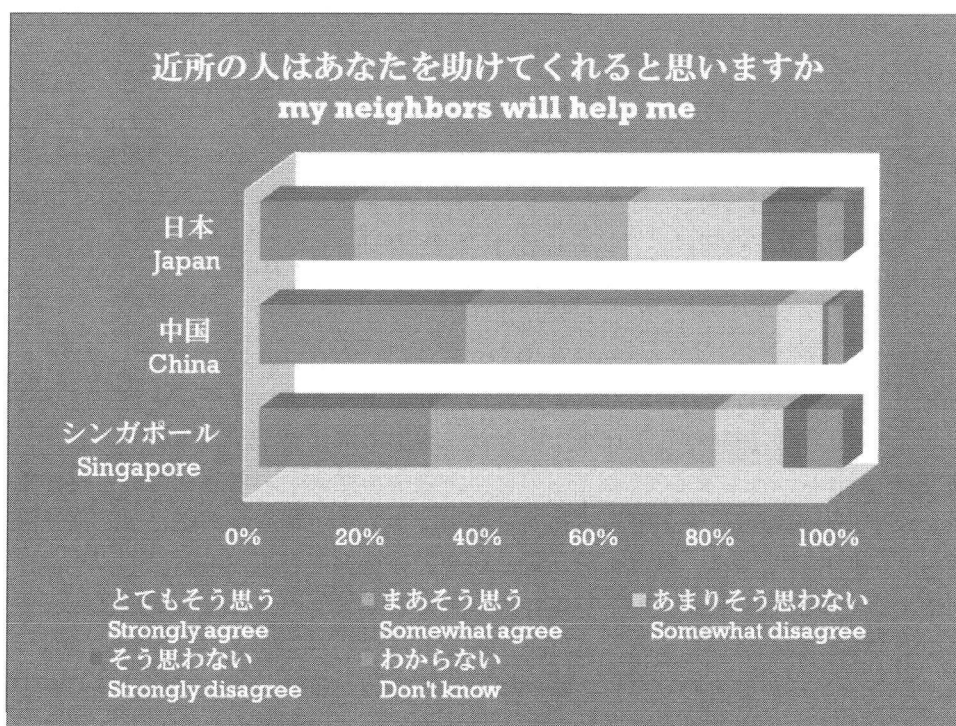
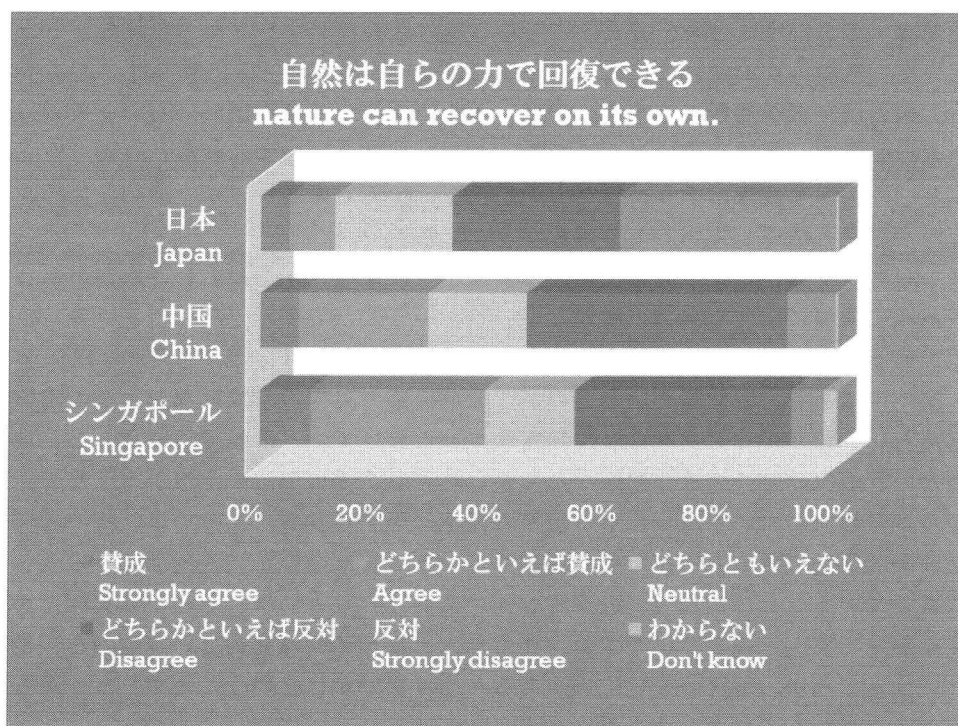
次、「この2つの意見のうち、あなたのお気持ちはどちらの意見に近いですか」。これは、子孫のための経済発展か、環境保護かという質問です。1番は、「子孫のためには、経済発展が多少遅れても、今ある自然をできるだけ残すべきだ」。2番は、「子孫のためには、自然が多少破壊されても、今の経済をできるだけ発展させるべきだ」。気持ちはどちらに近いのか、という質問です。「今ある自然を残すべき」というのが、ここまでですね。日本の場合には、非常に高いということが分かります。それから、「今の経済をできるだけ発展させるべき」というのがこちらの部分ですけれども、このような結果になっています。先ほどの、「自然は自らの力で回復できる」という質問に対する賛成・反対の度合いについて、今の質問に対して「経済を発展させるべき」と答えた人と、「自然を残すべき」と答えた人とで比較してみましたところ、「今ある自然を残すべきだ」と答えている人は、「自然は自らの力で回復できる」ということに反対の傾向を示しています。それに対して、「経済を発展させるべき」だと考える人たちは、賛成の傾向を示しているということが分かりました。

次に、住んでいる地域の自然環境の状態について聞いています。「あなたの住んでいる地域の自然環境の状態についてどう思いますか」。「良い」、「やや良い」、「やや悪い」、「悪い」ですね。そうすると、ここが「やや良い」ですから、自分の住んでいる地域に関しては、比較的「良い」と答えていることが分かります。シンガポールの場合には、その割合がかなり高いことが分かりました。そこでもう1つ、別の質問なんですが、「あなたは、これからもずっとこの地域に住み続けたいと思いますか、それともいつか引っ越そうと思いますか」。定住意識といいますか、その地域にずっと住み続けたいかどうかという意識を聞きました。「ずっと住み続けたいと思う」、「引っ越そうと思う」という割合が、それぞれこれぐらいの割合です。そこで、「住み続けたい」と思うと答えた人と、「引っ越そうと思う」と答えた人に分けて、それぞれについて、住んでいる地域の自然環境の状態を聞いた質問との関係を調べてみました。すると、「引っ越そうと思う」と答えた人の方が、やはり自然環境の状態が悪いと答えています。つまり、「引っ越そうと思う」と答えた人たちは、自分たちの地域の環境が悪いと考えていることが分かりました。

それから、これはコミュニティ意識を聞いた質問です。「あなたが困っている時に、近所の人はあなたを助けてくれると思いますか」。「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」というのがこのような割合です。そうするとですね、中国、シンガポールに比べて、日本の場合、「そう思う」という人の割合が少ないことが分かりました。そこで、先ほどの、「ずっとこの地域に住み続けたいと思うか、それとも引っ越そうと思うか」という質問に対する答えと比べてみますと、引っ越そうと思う人というのは、近所の人を助けてくれると思う傾向が少ないと。特に、日本の場合にはかなり逆の方向に向いているということが分かりました。次に、一番最初の質問ですけれども、「地球環境を守るために努力する」と答えた人と、「生活を便利にすることを考える」と答えた人とで、それぞれ「近所の人を助けてくれると思いますか」というコミュニティ意識がどのように関係しているかを見たのがこの結果です。やはりですね、「地球環境を守るた

めに努力する」と答えた人の方が、近所の方が助けると答える割合が高いことが分かりました。それだけコミュニティ意識が強いということが示されています。





そこで、まとめをさせていただきますが、まずここでは、便利な生活を求めることと、環境を保護するということを、対立的にとらえてみたわけです。どちらを優先すると答えたかという、その人々の考え方によってですね、他のことがらとどう関係するかを見たわけです。例えば、環境問題の重要性の認識、あるいは進んで環境にいいものを買おうと思うという行動意図、経済発展に対する意識、あるいは自然に対する意識、自然は自ら回復出来るというような認識。そういったものが全て、環境を保護するか、便利な生活を求めるかという意識と関係していることが分かりました。

それからもう1つ、ここで問題提起したのは、コミュニティ意識というものがあって、これが地域の環境に関する意識と関連しているということですね。そして、コミュニティに属していることによる人間関係があります。今回の結果では、どうもそのコミュニティ意識、その中にある人間関係というものが、環境保護に対する意識となんらかの関係がありそうということが、データとして示されているわけです。それで言いますと、地球環境問題というのは非常に大きな問題なんですけれども、その解決の手がかりとして、もしかしたら自分の住んでいる地域、その地域の環境に対する意識。あるいは、その地域に定住したいかどうかの意識といったものに意味があるのではないかと。それは、そのコミュニティに属していることによって、人々がお互いに助け合うという、そういう実態とも関係してくるわけです。その辺りにですね、非常に大きな地球環境問題というものを、地域の環境というところから解決していく鍵があるんじゃないか、ということが、この調査のデータから示されたんじゃないかと思います。

今後もう少し、その辺りを細かく見ていきたいなと考えています。今日は、このデータの紹介ということにさせていただきます。ありがとうございました。

● 田中淳氏

はい、どうもありがとうございました。

個人意識レベルでの環境保護派、そして、生活利便派。ただ、その中で起点として、むしろ、コミュニティの意識が、解決のヒントとして重要なんじゃないかというご指摘だったと思います。

続きまして、浙江大学の鄭全全先生、よろしくお願いいたします。

● 鄭全全氏

大島先生、この会議にご招待いただき、誠にありがとうございます。また、発表の場を頂戴したことを、厚く御礼申し上げます。私は、中国の浙江大学からまいりました。今日は、この場をお借りいたしまして、私どもの行った調査の結果を説明させていただきます。

私どもの発表の演題は、中国浙江省における環境に対する関心度調査です。浙江省を選んだ理由といたしましては、経済発展が著しい中国の典型的な省であり、トップ4に入っております、上海もちろんこのトップ4に入っておりますが、上位4地域に入っているということで浙江省を選びました。

では、こちらが私が話す内容です。最初に、環境保護が重要であるという理解がどんどん深まっており、その重要性が増しているという事態をご理解ください。ここでは、環境

に対する関心の定義が書かれております。我々の考えといたしましては、環境に対する関心というのは、環境に対する個人のアイデンティティ、すなわち環境の現実に関する認知、感情、行動、そして環境に対する価値観、環境に対する哲学、さらに環境に対する責任感というのが包含されております。そして、この態度の核となるのが人と環境との関係にあるという風に考えています。

海外および国内の調査報告をもとにして、分かった点がいくつかあります。中国においては、いくつかの調査がすでに実施されております。とは言うものの、環境に対する関心についての満足のいける、そして合意が得られている測定の数値、ツールというのが、具体的に定義されておられません。そこで我々は、環境調査を行う際に活用出来る新しいツールを開発して測定を行おうと試みました。

まず、環境に対する関心度の数値というものを開発いたしました。そして、それをもとに浙江省で調査を行いました。これが、我々が開発いたしました、環境に対する関心度数値を用いての調査です。このような数値の設計を行いました。この数値は、3つの部分から構成されております。1つ目は環境知識サブスケールというもので、19項目から構成されております。2つ目は環境意識のサブスケールで、この中には37の項目が網羅されております。3つ目の部分が環境に対する行動サブスケールで、この中には20の項目が入っております。この数値を用いて、浙江省で調査を行いました。その中には、杭州、寧波、温州、金華、および紹興という場所が含まれております。大都市、中規模な都市、そして郊外、田舎、農村地帯が含まれております。ゾーニングシステムを用いて層化無作為抽出によるサンプリングを行いました。1200の調査票を送りまして、1066の有効な回答を回収しました。回収率は、88%でした。

こちらには、デモグラフィック変数が書かれています。性別、年齢、教育、職業、所得、そして、住環境です。

環境知識のサブスケールにおいて、主成分分析と因子分析を用いました。その際に、バリマックス回転を用いました。その結果、2つの重要な因子を抽出いたしました。それは、日々の知識とエコロジーに関する知識というものです。信頼性分析を行った結果がこちらに書かれています、満足のいくクロンバックの係数値が得られています。日々の知識の定義ですが、環境保護に関する一般常識という風にしております。そして、エコロジーに関する知識というのは、技術的な用語やそれについてのセンスのことで、奥が深い知識です。

環境意識のサブスケールというのがありまして、ここでは5つの因子が重要であるという結果で、クロンバックのアルファ信頼性係数も満足のいく値になっています。環境意識のサブスケールの因子ですけれども、まず環境認知です。これは、周りの環境をどのようにに自覚し、どれだけ環境保護が急務であるかという態度を持っているかです。2つ目の因



子は環境哲学で、どのようにして人間と自然の環境を見ているかという項目です。3つ目が、環境に対する価値観で、環境がどれだけ重要かという判断です。4つ目は環境に対する責任感で、おのおのが、環境保護に対してどのような役割を行わなくてはいけないのか、担わなくてはいけないのかという要因です。そして5つ目は、環境を保護する行動傾向の要因です。

これは、環境に対する行動のサブスケールです。因子分析の結果、2つの因子が抽出されました。心臓に根付いた行動と、それから表面的な行動に分けました。また、信頼性分析も行い、こちらの信頼性も十分な値が出ました。心臓に根付く行動というのは、その行動をとってとらなくても誰にも批判されないような、とにかく環境を保護するという強い意識を持つということです。2つ目は表面的な行動で、これは社会的規範であって、もしも他者と同じように行動をしなければ、それは恥になるという種類の行動です。

こちらの方では、確認的分析を行っております。モデルの指数、これは当てはめのよさですけれども、ほとんど全てのモデルにおいて満足いけるレベルになっています。

では次に、浙江省における調査の結果をお話いたします。ご覧のように、これが全体の結果です。環境知識のサブスケールは、先ほど申しましたように2つの因子からなっています。すなわち、日々の知識と、それからエコロジーに関する知識です。2つ目のサブスケールは環境意識で、5つの因子が入っています。3つ目が環境に対する行動で、2つの因子が入っています。結果といたしましては、中国全土の調査を行った結果との比較、また中国で行われたその他の調査結果と比べて、浙江省における一般市民の環境知識というのは、平均レベル以上であるということが分かりました。また、人々の日々の知識の方が、エコロジー知識よりも高いということが分かりました。日々の知識というのは、例えば一般の人々が持つ、環境に対する常識ですけれども、質が高いということです。他の中国の地域にも、浙江省における環境に対する意識が高いということが分かっております。ある調査の結果では、中国では、中央政府または自治体に対して環境保護をしてほしいという意向が強いということが分かっておりますけれども、それに比べて浙江省ではそうではないと。すなわち、個々の責任感が強いという結果が出てきております。

環境に対する行動ですけれども、浙江省においては、環境に対する行動というのは平均以上であるということが分かっております。また、エコロジーに対する行動よりも、表面的な行動の方が高いということが分かっております。そこで、意識よりも行動の方が遅れているということが分かりました。環境に対する意識は高いということが分かりましたが、実際にそれが行動に変化しているかという点で見ると、行動にはまだなっていない、繋がっていないということが分かりました。

さまざまな集団ごとの比較を行いました。こちらに列挙いたしましたものが集団変数で、どういった測定を行ったのかが書かれております。まず、環境の知識及び行動ですけれども、全体の統計データがこちらに出ています。時間があまりありませんので、簡単に結果のみをお話いたします。

若い人々の方が、環境に対する関心が高い。また、より多くの知識を持ち、そして日々の行動にそれを反映させているということが分かりました。また、こちらは職業別の結果です。2つ目の要素が職業ですけれども、いろいろなグループに分けて分析してみました。

例えば学生、農民、実業家、それから経営者、従業員、先生、政府高官、公務員、失業者、その他となっております。結果ですけれども、多重比較をしたところ、学生及び公務員というのは、平均よりも高い日々の知識、およびエコロジーの知識を持っている。一方、失業者というのは環境知識が最も低く、公務員が環境に対する行動が最も高いことが分かりました。学生の環境知識が高いということは、学校における環境教育が成功しているということを反映しております。環境を保護しなくてはいけないという意識が、植え付けられているということです。また、公務員における点数が高いということは、政府そのものが、環境問題を深刻にとらえているという証しです。

これは、所得レベル別の比較です。世帯の所得と、それから環境知識の関係が高いということが分かりました。しかしながら、最も高い所得レベルの人というのは、エコロジーに対する知識が低いということが分かりました。

これは、どこに住んでいるのかという住環境別に比較したリストです。都心部に位置する人々と農村地帯に住む人々における知識と行動には、違いがないということが分かり、これは、前の調査とは全く違った結果になっております。なぜかということを考えてみましたが、例えば、浙江省の農村地帯に住んでいる農民は、テレビを見て、さまざまなマスコミの情報に触れることが容易に出来るようになっております。そして、この農村地帯というのは、急速に開発が進んでおりますので、それに伴い環境に対する知識および行動に繋がるような環境が整っているということが言えます。いかんせん、日々環境が劣化しているのを目の当たりにしておりますので、特に農村部においてはどんどん町が開発されているので、その深刻さというのを認識しているということが言えます。

次に、環境意識をグループ別に見てみました。その結果、若い層の方が環境に対する意識をより高く持っているということが分かりました。これは教育レベル別の比較です。教育レベルが低い場合には、相反する考え方を持っていることが分かりました。従来の環境に対する哲学は持っている、しかしながら環境に対する価値観はあまり高く持っていないということです。ということは、強い意思を持って、環境を保護するという気持ちがないということです。小学校以下の教育しか受けていない人々は、哲学に関しては高い点数を得ていますが、環境に対する価値観に関しましては、他の教育レベルのグループと比較して、大変低い数字となっております。この農民というのは、環境の哲学の点数が最も高い。しかしながら、環境に対する価値観が大変低くなっているというのは、とても興味深い結果です。あとで、このことについてお話ししましょう。

また、住環境別の比較をいたしました。農村地帯に住んでいる人々が、最も高い環境哲学の値を示しましたがけれども、先ほどの例と同様、環境に対する価値観は最も低いということが分かりました。農民は、従来の環境に対する哲学をとっても高く持っております。環境及び自然に対する、従来の価値観というのは持っています。中国の従来の考え方といたしましては、天と地と、この地の人間というような考え方があるからです。そして、その三位一体で 1つのユニバースが形成されているという考え方です。天と地と、それから人間とが、調和をとって生活すべきであるというのが、従来の考え方です。そこで、農村地帯に住む人々は、自然に頼って生きていく、そして、天に全てを任せるとするような哲学は持っております。とは言うものの、自分たちも開発の波に乗りたい。そういった要望

が強くなりますと、物の考え方が変わってきます。農民というのは、大変自然と近い所に住んで、生活をしています。そして、我々の食べる物というのは、天からの贈り物、恵みであるという風に考えております。そこで、人は自然に順応しなくてはいけない。従順になり、そして自然の中に溶け込んで生活すべきであるという風に考えております。しかしながら、一方、農民というのは最も貧困な層に属しておりますので、とにかく開発の波に乗りたいという風に考えております。開発をすることによって、富を享受することが出来ると。従って、環境を保護したい人が、一方でもっと豊かになりたいという、相反する価値観を有しているのが農民です。実際、浙江省においては、省のGDPの70～80%が自営業の人々から創出されます。そして、農民は20%以下です。そこで、農村地帯に行きますと、どんどんどんどん実業家の数が増えていき、富を追求し、より豊かな生活をしたいという風に考えています。そうなりますと、今、一時的に環境に対する保護の意識が低くなっているということが言えましょう。

では、この調査結果をまとめます。環境に対する関心度尺度ですけれども、我々は、新しい尺度を開発し、5つの環境意識の次元を網羅いたしました。それらは、認知、哲学、価値観、責任感、それから行動傾向です。また、一般的に言えることは、環境に対する関心というのは、環境の知識、及び行動も包含いたします。2つ目の結果といたしましては、一般の人々の環境知識および意識というのは、浙江省においては平均以上です。認知度は高く、そして、責任感も高いということが言えます。また、比較的高い意識で、比較的低い行動に繋がっているということが、現状であるということが分かりました。そして、日々の知識というのは高い。しかしながら、行動及び、エコロジーの知識は低いということが分かりました。農民たちは、従来の環境哲学を享受しております。しかしながら、彼らは環境に対する価値観は低く、いくら環境を保護しようという気持ちがあったとしても、それ以上に、もっと豊かになりたいという気持ちが強いということが分かりました。

ここで、2つの問題を投げかけて話を終えます。従来の環境に対する哲学ですけれども、この環境に対する哲学というのは、現在の環境に対する価値観と短期的に相反するものであるということが言えます。どのようにしてこの対立を解決するかということを、今後模索しなくてははいけません。2つ目は、実業家、自営業の数が増えてきております。西欧諸国と比較いたしますと、我々は、今後開発が更に進みます。そして、彼らは新たな実業家になったわけですので、まずは開発し、そして開発の波に乗り、富を手にすることが出来れば、その資産を用いて環境対策を練ることが出来るのではないかと考えているのかも知れません。

どうでしょうか。私の2つの問題をご理解いただけましたでしょうか。1つ目は、従来のものの考え方と、それから一時的な環境に対する姿勢というのが連動しているという点です。それから、2つ目のポイントは、西欧諸国が環境保護に対して担っている負荷と同じ負荷を、中国も担わなくてはいけないという風に考えておりますが、発展の度合いが違いますので、まずは発展し、そのあとにこの環境対策を練るべきであるという風に考えているようです。

ありがとうございました。

●田中淳氏

ありがとうございました。今ご指摘いただいたのは、さまざまな意識構造、かなり複雑な構造を明らかにされた上で、例えば農村部を例にして、急速な開発が進む中での所得の状況における差といった問題を、どう見ていくかというようなことをご指摘されたと思います。

では、国立シンガポール大学のヴィクトール・サベージ先生、お願いいたします。

●Victor Savage 氏

皆さん、おはようございます。大島先生、このような機会にご招待をいただきましてありがとうございます。

今世紀、3つの大きな環境問題があると思います。まず、地球の気候変動と温暖化。2番目が水の枯渇。そして3番目が環境汚染です。これらは、食糧の生産に直接的な影響を与えます。日本では、これら問題のために、今世紀末までに米の生産量が40%減るかもしれないと今朝の新聞に書いてありました。気候変動に関しては、ティム・フラナリーが2006年に論文を出しました。それから2007年のスターンレポートとか、またIPCCのパネル報告書も皆言っておりますけれども、例えばフラナリーなどは、2050年になりますと環境は自然のプロセスでなく、完全に人間のプロセスになってしまうであろうと言っております。

私の話ですが、5項目に大きく分けてお話ししたいと思います。政府の見方、一般の人たちの見方、マスコミの見方、NGO、それから伝統的な自然観という、こういう流れになります。

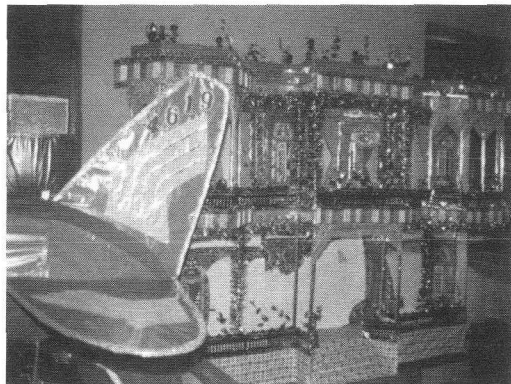
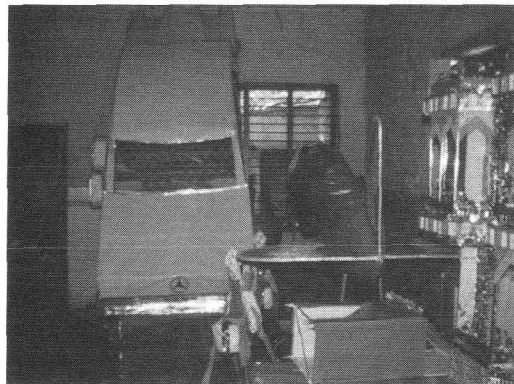
さて、いろいろな気候変動の研究が行われているのですが、政治家や政府はどういう見方をしているのでしょうか。環境に対して、政府や指導者の役割というのは非常に大きいのです。たとえば、ジョージ・ブッシュに対してクリントン政権、それにアル・ゴアという風に比べますと、これらの環境政策がいかに対照的であるかが分かると同時に、こういった指導者の環境観が非常に重要であるということが分かると思います。シンガポールにおける、環境に関する政治イデオロギーを見てみますと、この環境決定論的であり、それからまた、環境ポシビリズムがあると思います。

まず、環境決定論に関して言いますと、とにかくシンガポールは小国であり、人口も少ない、国土面積も小さい、資源もない、だから、というのが政府が毎日繰り返すことなのです。一生懸命働かなければいけないんだと。とにかく勤勉しなきゃいけないんだと。資源もないし小さな国なんだから、遊んでる暇なんかないんだと。リスクをとっている余裕もあまりないんだ、というのが政府が繰り返し言ってきていることなのです。従って、なん



でも計画的にやるというのが、シンガポール政府の金科玉条になっております。都市計画もそうですし、人口も出産計画もある。なんでも計画するというのが政府のやり方なわけです。とにかく、全部計画を立てておく。教育もそうで、毎年、どの大学の学科と学部はこれだけ大きくするとか小さくするとか、5年経つと景気・経済がこのように変わる予定であるとかいうことで、全て政府が計画を立てるわけです。というのは、そうすることによって、生産性を高め健康な国民を確保できるという信念があるわけです。この環境決定論は、新しい環境主義と言ってもいいと思います。それから、一方でヘロドトスも言っておりますけれども、文化とか人間性というのは環境で決まるのだという考え方があります。政府も、実際にそのような考えでして、ラジャラットナム外相の言葉をここに引用いたしました。一生懸命働いて、よりよい環境を作れば、いい国が出来るんだ。ところが、エアコンの効いた部屋でダラダラしていると、そうはいかないんだ、という考え方があります。シンガポールの政治イデオロギーとして、とにかく、これらは強烈な流れを持っているわけがあります。

それからまた、環境ポシビリズムというのもあります。これは、どちらかというと環境決定論と反対なわけですが、小さな国で、資源もないんだから、とにかく科学技術を進めて、実利主義で、合理主義でいくことによって、我々は生きていけるんだと。すなわち、科学技術を生かすことによって、シンガポールが抱える環境の制約を乗り越えることが出来るんだという考え方があります。政府のこういったイデオロギーが、まさに環境ポシビリズムのいい例だと思えるのですが、ひたすら自然よりも人間優先、人間中心というのが政府の考えです。さらに、科学技術重視であります。政府の予算も大変潤沢に投じられて、エンジニアの育成にも余念がありません。それから、とにかく現実的な解決策ということを重視いたします。中国人にはそういうところが昔からありますが、それに西洋型の合理主義が組み合わさっていると思います。西洋の合理主義思想、それから中国人が昔から持つ実利思考、現実主義思想が融合されていると思います。一方、人材育成を重視しております。教育は政策としても非常に重視されております。貧しくっても、例えば奨学金などをもらって大学に行ける、勉強出来るようになるということでもあります。国家予算の一番大きな部分を占めるのは国防予算ですが、2番目にくるのが教育でして、政府の歳出の15%~20%を占めています。それからまた、人間が工学的に手を加えることによって庭園都市を造れるんだという考え方があります。ポシビリズムのもとにあるのは、まさにこの物質主義的な社会なわけですし、中国人は死にますと、なんでも燃



やして次の世代へ持っていくという考え方があります。車もそうなんですね。それから大きな家、シンガポール航空の航空機。なんでも燃やして新たにし、そして豊かになるんだと。日本では、大島先生が先ほどお話してくださいましたけれども、脱工業化社会になっているんですが、シンガポールはそうではない。この振興著しく、新しく豊かになった国の象徴ではないかという風に思います。例えば、このリー・クアンユー元首相の言葉から、いかに現実主義かということが分かります。これは、シンガポールを庭園都市にすることを進めている時の話ですが、外国からCEOなどに来てもらう、そして投資をすることを決めてもらう時には、庭園都市であることを見せるのが重要だと。それを見せれば、シンガポール人は有能で規律が取れて、そして職業に必要な技能もあつという間に身に付けてくれる国民だと思ってくれるだろうという考えです。シンガポールは水が足りないのでありまして、半分はマレーシアから輸入しています。水確保の方法として、トイレなどからの再生水が非常に多く使われています。トイレの流した水をまた集めて、もう1回水道水にも飲料水にもするわけです。ほとんどの水は、実はトイレなどから集めた再生水でして、シンガポールで一番大きな割合を占めます。そのほかに、集水機から集めるものもありますし、海水の脱塩淡水化も行われています。シンガポールが持つ水の技術のレベルは非常に高くなっており、予算もかけてこの技術開発に余念がありません。国外からも、これについては大変関心を集めています。

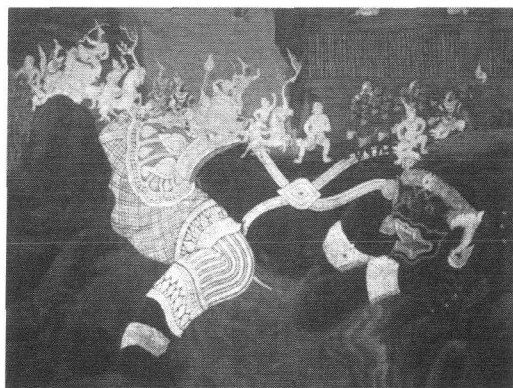
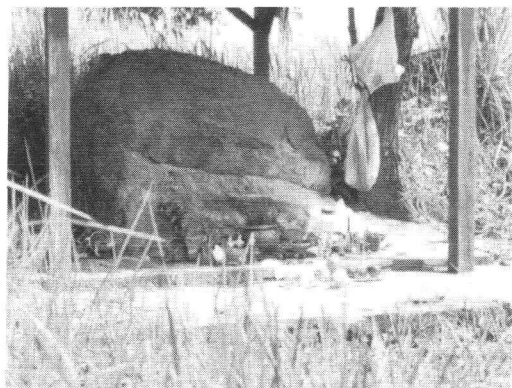
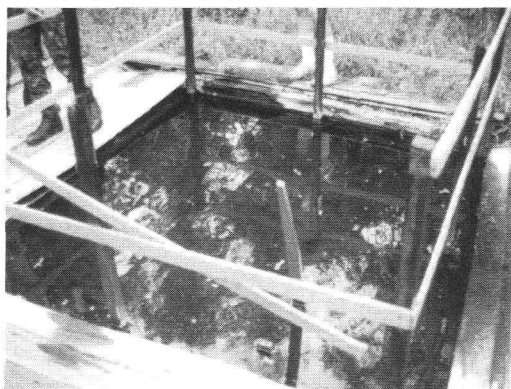
先ほど、鄭先生から浙江省のお話がありましたが、シンガポール人の環境意識についても、知識のレベルは非常に高いのです。これは、2006年にシンガポールの環境省が学生を対象として行った調査ですけれども、100点満点で90点を取りました。ところが、それが行動に表れているかと言いますと、そうではないということが分かっています。環境に関する学校のボランティア活動に参加したことがある人は43%しかいない、リサイクルされた製品のためにもっとお金を出してほしいと思う人は36%しかいない、人生には環境よりもっと大事なことがあると感じている人が30%。買い物袋を再利用する人は58%しかいない、包装の少ないものを選ぶ人は54%しかいないということでもあります。それからまた、教員などを対象にいたしましても、知識はあるけれども行動に繋がっていない。例えば、環境に関するいろんな展示会とか、そういう所に行ったことが一度もない、あるいはほとんど行ったことがないという人は68%もいるわけで、そして水の節約のためにシャワーの時間を短くしようと思う学生、生徒は28%しかいないということが分かっています。私が所属する国立シンガポール大学でも、環境のために範を垂れるような役割を果たしていこうということで標語を持っています。しかし、ここにありますように「ベリタ・ハリアン」という日刊紙、そして「ベリタ・ミンゲー」という日曜紙があるんですが、この2つのマレー語の新聞を対象にしまして、75年、80年、85年、90年に調べてみました。そうしましたら、やはり自然に関するメディアの関心というのは、どうしても自然災害、天災のことばかりでありまして、環境に関してはあまり注目が払われていないということが分かりました。1面に出たニュースは一体何かというと、地震や洪水、ハリケーンなどに非常に関心が高いので、やはりこういった災害関係のニュースなわけでありまして。

環境NGOとして唯一言及に値するのが、シンガポールの自然協会だと思うんですが、

非常に活発に活動しております。この組織が、特に力を入れて政府に訴えかけた環境問題というのは、91年にサギの営巣地に政府がテレビ塔を造ろうとしたときです。そんなものを造ったら、木の上にあるサギの巣がみんな落ちてしまって、卵も落ちる、ヒナも落ちると、大変なことになってしまうので、国民が大変な反発をいたしました。このときに、政府は初めて、国民はこんなに環境問題に関心があるんだということに気付いたわけです。マスコミでも大変な騒ぎになりました。政府は、やがて政策を変えるに至りました。それからもう1つ、このシンガポールの自然協会が力を入れたのが、取水域の隣に政府がゴルフコースを造ろうとしたときです。ここにいろんな動植物がいるということが分かりまして、絶滅危惧種なども失われる可能性があると考えられたのです。ここに、動植物のいろいろな科や種、そして属というように分けて例をあげましたが、いろんなものがあるということが分かりました。やがて、政府は計画を棚上げにしました。それから、もう1つは93年に、セノコ・バード・サンクチュアリにニュータウンを造ろうとしたときですけれども、これは最終的に決行されてしまいました。あと、チェックジャワという海岸沿いの生物多様性が豊かな所がありますが、2003年に政府がここを埋め立てようとしたことがあるんですが、やはり反対がありまして、棚上げになりました。

さて、伝統的な自然観については、インド、中国、マレー系などについて、すでにいろいろご紹介ありましたが、例えば日本で神道にあたるようなアニミズム的な考え方は、マレー人の間に非常に強くあります。これは水がある所でケラマツトというのですけど、タコンという島にこの聖なる場所があります。中華系の華僑も同じでありまして、水が非常に大切な所というのがあって、そこから水を取ってきて、その水で洗車をすれば交通事故に遭わないと信じている人もいます。また、これが聖なる岩であると考えている人もいます。非常に大事な、霊が宿る岩であるとして守っている人もいます。

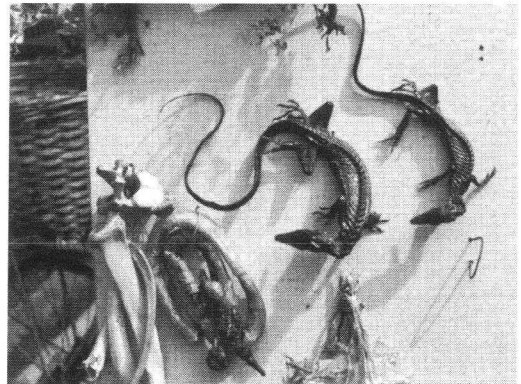
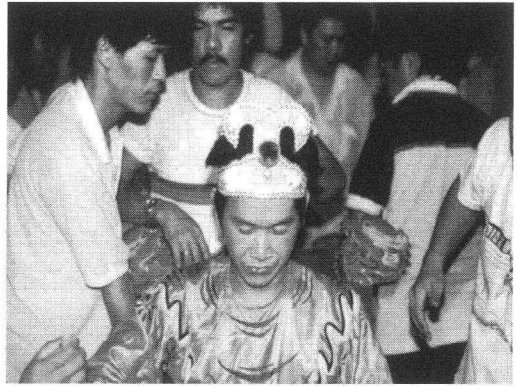
ラーマーヤナの物語をご存じでしょうか。猿の神様がこのように海を渡り、追っかけてくる悪者から逃げたという、スリランカとインドの間の絵なんですけれども、ここが今論議を呼んでいまして、この環境も変わるかもしれないということです。このような猿の神



様は、8世紀から中国にも入ってきて、非常に重要な意味を持っています。この人は伝統的なシャーマンです。シンガポールではタンキーというのですが、この人に猿の霊が宿ると、猿のように宙返りしたり、逆立ちしたりするという、そういう風習もあるのです。

シンガポールは熱帯にある国ですが、マレー文化、インド文化、中国文化が強く入ってきています。従って、中国の四季の慣習を守っています。例えば、中秋であるとか、この人はオレンジを売っているんですけども、オレンジは金を表すと言われて大事にされています。それから「8」というのは幸運をもたらすいい数字です。ここにはパクチョイや魚が並んでいますが、それぞれに意味のある自然のものでありまして、幸運をもたらすと言われています。風水は、韓国にも日本にも入っていると思いますが、今でもよく実施されています。それから、バナナというのは霊の転生の表れであるとされており、これはヒンズー教ですけれども、棺にバナナの葉っぱを飾っているのを見たことがあるかもしれません。

バナナを植えれば、亡くなってもまたすぐに生まれ変わる。バナナというのは枯れてもすぐに根が張って伸びてくるので、亡くなった人もその霊が生まれ変わる、転生を繰り返すという意味があるわけです。それから、インド系の人は鳥を運勢を占う存在として大事にします。鳥は空を飛ぶ、そして天に近付けるということもあるかと思います。なんらかの神聖なものを、そこに感ずるのかもしれませんが。最後に、今世界の中で1つの問題になっているのは、漢方薬などでは、サメとか、タツノオトシゴなどといった生薬の材料を使いますが、その消費が増えています。カエルやウミガメ、トカゲなんかも体にいいからとか、媚薬的な効果があるということで使われています。それから、角なんかも使われます。これらは、絶滅危惧種であるにも関わらず、捕獲や消費が非常に増えているとい



うことで問題になっているかと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

●田中淳氏

どうも、ありがとうございました。

やや時間が押してきてしまいましたけれども、指定討論に入りたいと思います。総合地球環境学研究所、鄭躍軍先生、よろしくお願いいたします。

●鄭躍軍氏

ご紹介に預かりました、総合地球環境学研究所の鄭と申します。よろしくお願いいたします。

公開シンポジウム「地球環境とアジアの価値観」というタイトルで、4名の先生方からいずれも現場密着的な話を中心に、非常に楽しい話をいただきました。例えば、村田先生からはジャーナリズムというスタンスから、環境教育というキーワードでどのような形で進めるべきか、どのようなやり方で分かりやすく、面白く人に伝えるかという話。最終的には行動として定着するという話になるのでしょうか。続きまして、大島先生は、シンガポール、中国、日本の環境に関する意識調査の、実際のデータから、いろいろな意識の間の因果関係、特に地域ごとの違いについての細かい分析を、楽しく聞かせていただきました。それから、鄭先生には、浙江省、ここは中国の中では比較的環境的に優等生的な存在の省ですけれども、現地の調査を通して、人口社会学的要因と環境意識の相互関係についての分析を披露していただきました。最後に、サベージ先生から、シンガポールという非常に都市化した国の中から、人々、そして政府が、どのように環境問題に取り組んでいるか、あるいは教育の中でどのようなことを聞いているかということについて説明がありました。

私の方から、簡単にそういう膨大な分析を総括することは出来ないんですけれども、自分が今まで環境意識というキーワードから得たものと、今日共感したものを簡単に披露して、最終的に4名の方に簡単な質問をさせていただくという形を取りたいと思います。

環境意識というのはいろいろな現場で使われているんですが、じゃあ一体何を意味しているのか、あるいは人のどの部分が映っているのかということは、私自身もいろいろとそ



ういう研究はやってきました。冒頭に大島先生から出された「人間が環境問題を起こした」という前提で話すとするれば、その鍵を握っているのはやっぱり人間で、更に言えば、心理学的なアプローチが必要ということになります。私の方からは、そのあたりの話からスタートして、未来の世代の能力をどう養成するか、あるいは持続可能な社会を作るには人間自身がどうすべきかという話をしたいと思います。

私自身は、これまで東アジアの価値観調査、そして大都市の環境意識の国際比較調査を行い、そ

して今現在、環太平洋地域、アメリカ、オーストラリア、インドを含めて、調査を実施しているところです。そもそも、環境問題の根源が人間にあるとするならば、人間のライフスタイル、あるいは行動パターンをもう一回見直す必要があると思います。そのような生活スタイル、あるいは環境に対する行動、更に政府の政策に対して大きな影響を持つのは、やはり環境意識ということでしょう。最終的には、個人個人が多種多様な意識を持つのは当然ですけれども、お互いに1つの社会に存在する以上、相互作用によって形成した市民意識の方にもっと力を入れるべきじゃないか、あるいは注目すべきじゃないかというのが私のスタンスです。意識というものは、私は門外漢ですけれども、心の中の動きといった外からはなかなか観測しにくいものです。環境意識の本質のところは、1つは今までにいろいろ指摘された意識、価値観というものがあるんですけども、これがある一定の空間と時間が存在する環境サイトと密接な関係がある。その環境サイトの歴史、現状、そして変化の理解、認識、価値判断というものになるんですね。更に言うと、そういう社会的要因以外は、環境の変化、あるいは続く時間、個人の感性、価値観、あと情報によって影響されるということです。そういう意味で、環境意識というものは、価値観、世界観、人生観というような意識に比べると、ちょっと変わりやすい部分があり、それは避けられない。

具体的にそれを考えてみますと、社会があって、その中から環境質の変化、それから社会的な規範と制度があります。最終的に、個人の感性と価値観というものはお互いに影響しあい、制約したり、あるいは修正しあったりというような中で、環境意識が存在するわけです。その意味で、環境意識が一定に保たれるというのはなかなか難しいということが考えられます。内容の方は、例えば、この意識を考える時に、ちょっと普通の価値観と違うところは、やはりさきほどの空間と時間軸という2つがある。過去から現在、そして未来ということを用いる時間軸と、身近なもの、地域のもの、国家のもの、地球規模のものという空間軸の中で、人々はどのような知識を持っているか、あるいは、価値判断を行っているか。更に、行動、あるいはその行動以降をどのように行っているかということは、やはり重要なファクターです。意識から行動に出来るだけ結び付くということは目的ですけども、ところが現実としては、そう簡単に線形的なものではない。やはりこの大きなギャップがあるということを、あとでデータで示すんですが、いろいろな意識の中で、最終的に自分の信念が何かということ。あるいは、自分が行動を起こした効果をどう認識しているか、あるいは判断するかということ。最終的にこの情報は、意識にどのような制御をして、最終的に行動のパターンを決めるのか。それ以降に移して、最終的にはさまざまな行動を行うわけですけれども、それと同時に外からの要因がいろいろあるわけです。こういう非常に複雑な質の中で、意識から行動までのプロセスをきちんと把握しないとなかなか難しいということです。そういう意味で、結論から言うと、意識というものは、行動を誘発する潜在力ですけれども、ただちに行動に結び付くのはなかなか難しいということです。更に、それが変わりやすいという部分がある。従って、この部分を考えると、村田先生の最初の話、やっぱり環境教育の役割は大きく期待されるんですね。

たくさんさんのデータを持っていますので、一部をちょっと示したいんですが、1つはですね、非常に大ざっぱな話、自然と人間の関係は、自然に従う、自然を利用する、そして自然の征服、その3つの選択肢を考えます。日本の場合は、60年代～70年代初めに大き

な転換があり、こういうパターンになったわけですが、それでも、「自然に従う」と「自然を利用する」が40%ずつ、残りは征服です。しかし、それが中国文化圏の方は、相変わらず征服の方がかなりの割合を示しています。一方、環境保全と経済成長の、そういう矛盾の中でどっちにプライオリティーを与えるかということを見ると、中国の方は全体的に見ると、ちょっとデコボコですが、環境保全の方が高いんですね。この結果がなぜ生まれるかということは、ひと言では説明出来ないんですが、現状が厳しいからそういう一面が見られると思うんですね。こういう傾向は、2002年～2004年の調査の辺りから年々見られます。少しずつ増えているという状況は、日本もそうなんですけれども、こういうことに深刻さが見られるんじゃないかなと思うんです。アメリカに比べると、東南アジアの方は自然に従えという、歴史的にそういう文化の中にあります。近年増え続けているんですが、中国はまだちょっと征服の割合が高い。全体的に、環境保全を優先させるといふ割合は多い。

一方、具体的に、ちょっと顕微鏡的に見てみると、地元の環境を考える時に、例えば東京都と北京の大気汚染の状況は、東京より北京の方が2倍～4倍くらい汚染物質は高い。重慶も更にこのように高いんですが、じゃあ実際、人々はどう見ているかということをやちょっと見てみたい。まず左の方は、全体的に環境悪化に対する不安感ですね、どこも非常に高い。7割以上の人は心配しているという。ところが、自分の身近な空気の質、あるいは水質に対する満足度を見てみた時に、さっき見せたように東京の方は質自身が高いんですが人々にはそう映っていない。むしろ、これが比較的に悪い方の地域は、満足度が高いということ。これはなんだろうか、ということは1つ興味深いことなんです。更に、それが、具体的に自分の身近な行動、例えば、エコ用品の購入、リサイクル、節水、省エネ、公共交通手段の利用、有機野菜の購入という行動。リサイクルはソウルの方が高いんですが、リサイクル以外の他の行動は、いずれも北京の方が高い。日本の方はそこそこ、まあ他のところよりむしろ低いというようなことが映っています。これは一体なにか、ということをやちょっと簡単に言います。

都市は問わずに、環境悪化に対して不安が高いんですが、現状では身近な環境への満足感が環境の質とはちょっと乖離しているということが1つの特徴です。あと、行動に関しては北京が高いんですが、これはやはり何かあるだろうということです。1つ考えられるのは、例えば節水とかエネルギー節約ですね。環境より前には、多分お金の節約の方がかなりきいているということは、他の質問で映っていることから間違いないと思います。その意味で、環境配慮行動、そして意識、あと環境の現状の間の関係を、簡単なモデルで表すことは困難と言わざるを得ません。

そこでちょっと話題が変わりますが、公害問題について。ローカルな環境問題と、温暖化などの地球環境問題を考える時に、どこの都市を見ても、地元の空気汚染、水質汚染、緑の減少というものはそれほど心配していないにもかかわらず、地球環境問題となるといづれも高くなっているということが現状なんです。

それから、情報に対しては、どこの国、地域でも変わらないんですが、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌から情報を得るのが8割を占めています。政府、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、大学研究機関のそれぞれの情報源に対する信頼感を見てみると、日本はそんなに

変わらない。中国では、政府に対する信頼が非常に高く、9割くらいを占めている。それから、韓国では、台北もですね、大学機関への信頼が高いということですが、もちろん社会システムが違うので、その機関の性質が違うということに大きく影響されることは考えられます。そこで、非常に面白いことだと思うんですが、人々はですね、ローカルな環境に対してはそれほど悲観的ではなく、むしろ楽観的な意識を持っている一方で、はるかに離れて地球規模の問題に対しては、悲観的な態度を取るという傾向があるんです。その意味で、情報の影響がある程度の役割を果たしているということは言えるのではないかな。これはもちろん、更に分析する必要があるんですけども。また発信源は一緒であっても、信頼感に大きな差が出てくるということは、システム自身に違いがあるということが考えられます。

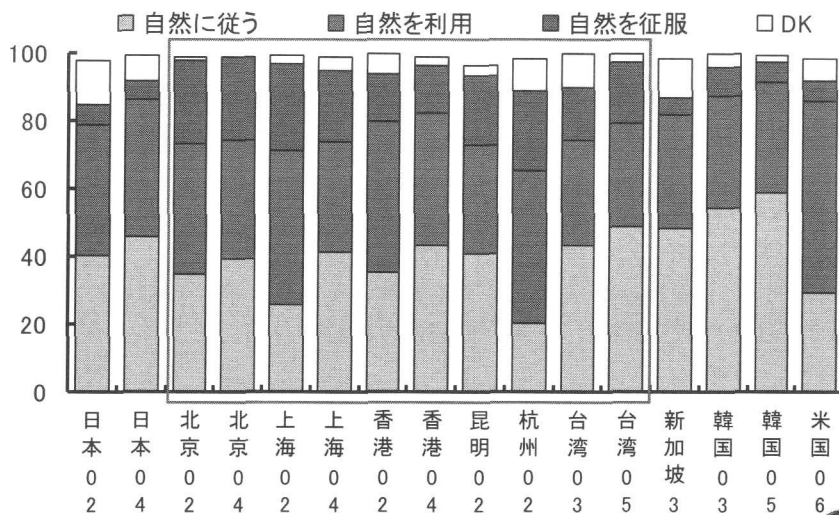
最後に、国際交流において、何を自国にとって重要な分野として考えていくべきか、あるいは深めていくべきかという質問です。挙げたのは、経済、文化、科学技術、そして環境。きれいに出ているのは、やはり東京では環境、それほど高くはないですが、3割以上の人は環境に対する考慮が深い。一方、中国の方は科学技術。そして、台北とソウルの方は経済。これは何が映っているかと言いますと、それぞれの国と都市の現状でしょう。中国では、自国の科学技術が遅れているということで、それが最優先。台北とソウルの方は、経済についてはある程度優等生的な存在ですけども、日本に比べてまだまだだということを考えれば、経済。日本は、やっぱり今一番求めているのが環境ということは、他国との隔たりが見えるんじゃないかなと思うんです。

以上のように、データから表れた意識の違いというものは、もちろん政治、経済、そして文化的な格差が一因になっているということを見逃すことは出来ないわけです。その意味で、今までの取り組みと違った、新しい取り組みの努力をしなければならないということが、こんなデータから見えてくるんじゃないかと思います。

これまでのまとめとしては、環境意識の客観的な情勢というのが、環境改善に重要だということは間違いない。ただし、環境意識は環境現状そのものではなくて、むしろ変化、あるいは最近の変化に対する主観的な判断だということを言わざるを得ないということです。そして、ローカルな環境とグローバルな環境に対して、大きな意識の差があるということは、やっぱり情報伝達が関わっているということが考えられます。更に、そういう発信源に対する差もあるということは、それぞれの社会背景制度、そして経済の格差から、その意識の差が生まれるということは当然ですけども、いかにこういう情報を生かして、新しいことに取り組むかということが我々の課題であると考えます。

そして最後に、私が今やっているプロジェクトの中で取り組んでいることですが、新しい協調社会の枠組みという考えが必要だと思います。環境問題への対応ではですね、経済的な損得のみならず、格差がある国、地域の環境調和、あるいは協調という意識を高めて、新しい枠組みを構築することが求められる。その中で、経済的、政治的な要素はもちろん重要ですが、環境の調和を考える時に、環境の不可分性、それから文化の連鎖性ということを中心に位置付け、そして重要な軸として取り組むかということが重要なことと考えられます。その意味で、意識ということを最終的に、どのようにして速やかに行動に定着するかということは重要な課題で、これからはそういう研究が中心になると思うんですね。

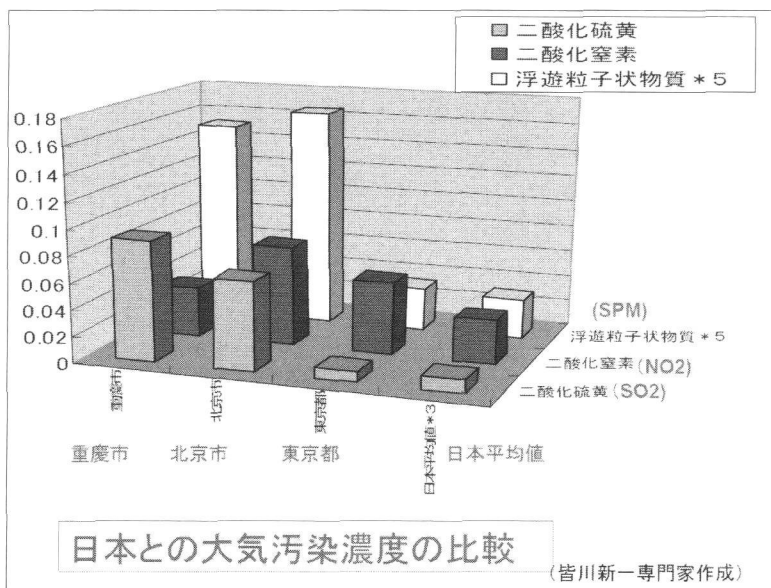
自然と人間



Research Institute for Humanity and Nature

日本心理学会第34回大会シンポジウム(070920)

9



最後に、4名の先生方に1つずつ質問させていただくことにします。

まず、村田先生から出された、エンターテインメントのスタイルで人を教育していくという非常に新しい考えが僕にとっては新鮮でしたが、その中から例えば、先生はいろいろな国際的な活動をされてきたんですけども、国の文化とか社会制度の違いを考えた時に、環境教育の何が決め手になるか、その手段について、もしも何かコメントがあればいただきたいと思います。

●村田佳壽子氏

これは、ヨーロッパの方が非常に進んでいるんですが、特にドイツなどではもう35～36年前からですね、幼稚園から環境教育ということをやっているんですね。例えば幼稚園の子どもたちに、使い捨ての容器ではなくて、何度も使える容器でお弁当を持ってくるようにしましょう、そのことをお家に帰ってお母さんに言いましょう、というような形で、親も子どもと一緒に環境教育をするということをやっているんですね。こういうやり方っていうのは、スカンジナビアのノルウェー、スウェーデン、デンマークなどでも早くからやられていたんですが、そういう例に共通して言えることはですね、一般の方たちの意識や知識のレベルというのを知った上で、そこに行動変革を起こすような伝え方を工夫する。つまり、分かりやすいように落とし込んでですね、一般人と専門家の間の通訳をするような形です。環境インタープリターっていうんですが、そういうような人を養成したりして、相手が分かるような情報の提供の仕方をするということに、非常に心を砕いてきたんですね。このやり方は、とても大切なことだと思います。

日本でも、環境省が1980年代の終わり頃に、環境インタープリターを養成しようということで、実は私はその養成の第1号だったんですが、なかなか日本ではうまくいかなかったんですね。専門家の方が、やはり自分の専門的な知識というのにこだわってしまう、あるいは、なかなか前提条件を崩しがたくてですね、一般の人に分かるような、ざっくりばらんな噛み砕いた言い方がなかなか出来ないっていうことがネックになっていたので、いかに相手のレベルを知って、それに合わせていくかということが、環境教育ではとても重要だと思います。

●鄭躍軍氏

はい、ありがとうございます。確かにそうですね。目的が理解出来る、あるいは目的に合うということが大切だということをおっしゃっていると思います。

それからですね、大島先生に質問を1つと、あと今後のことについて1つ聞かせていただきたいと思います。調査の時に、シンガポール、日本と中国の、それぞれの年齢がなんか違うんですね。例えば、日本では20歳～83歳まで、中国では20歳～64歳まで。その辺についての考えを教えていただければありがたいと思います。もう1つは、例えば環境重視か経済重視か、あるいは自分の利益重視かというような要素と、他の意識との関係の分析を細かくされたんですが、今後このデータをどのように展開するか、あるいは世の中に披露していくかということをお教えいただければと思います。

●大島尚氏

ありがとうございました。まず年齢ですが、ああいう形で示すとちょっと違ったように見えるんですが、例えば日本の場合に83歳が1人いらっしゃるかとですね、調査の時の技術的な問題として、シンガポールではもう65歳より上の人はもともと対象にしていらないんですが、日本の場合にはそういうものが入ってきた場合にはじかないというような、手続き上の問題なんですね。全体的な分布では違いがありませんので、年齢の幅でいうとちょっと違って見えるんですけども、それほど大きな違いはありません。ただ、年齢の違いというのも見ているんですけども、国によってデータがいろんな形で複雑に錯綜してしまっていて、先ほど鄭全全先生はデモグラフィックのデータとの関係を分析されていたんですが、私の方ではまだ、なかなかクリアにそのあたりが出てきていませんで、もう少し分析を続けてみたいなと思っていますところですよ。

それから、今後のことですが、先ほどちょっと申し上げたように、やはり地球環境問題という大きなことがらを人々がどう理解するかという時に、やはり皆さんがおっしゃっていたように、どうやって行動に移しているかというところが1つのポイントだと思います。そうすると、個人個人の環境に優しい、あるいは環境を守るための行動だけを見ていくのではどうも無理があるのではないかということで、コミュニティというものを取り上げているわけです。そうしてみたところ、先ほどデータでも示しましたように、日本の場合に非常にコミュニティの力が弱いという印象がありました。先ほどはちょっと飛ばしたんですけども、日本の場合には男性と女性でコミュニティ意識に非常に差がありまして、「近所の人は助けてくれると思いますか」という質問に対して、男性の場合に「そう思う」という回答が非常に少ないんですね。女性には、比較的「そう思う」という回答が多くあるんですが。そのあたりで、日本の社会というのは他のアジアの社会とちょっと違った側面を見せているなということがありまして、そういった日本の特殊性というのも見たい。今後、コミュニティを復活させることが1つの鍵になるんじゃないかなというように考えております。これからもう少し、その辺を中心に他の面も含めて調べていきたいなという風に思っております。

●鄭躍軍氏

ありがとうございました。最後にですね、鄭先生、それからサベージ先生は、日本に比べると、この2つの国はいずれも社会制度自身が若干違うとおっしゃいました。日本では民主主義制度の下で、人は間違っているか正しいかということにかかわらず、自由に考えて、自分で考えたことを述べるということなんですけれども、中国の場合はやはり政府に対する大きな信頼がある。シンガポールも、政治的な強いリーダーシップの下で成り立つ国ですので、その中で、例えば学生調査と一般市民の調査の中で表れたそういう意識の部分は、プラスの面とマイナスの面があるのですが、そのあたりを踏まえて、もしも何か教えていただければありがたいんですが。

●鄭全全氏

中国の方では、中央政府がどういった行動を取っているのか、また中央政府がどういっ

た行動を取って環境保護をしているのかというのを見ています。特に農村地帯の農民は、政府の行動を見ているわけですが、まず彼らといたしましては、富を追求し、そして、そのあとに環境保護をというような考え方です。そして、環境保護は政府に任せるとというのが現在の考え方です。従来の伝統的な環境に対する意見というののもまだ残っていますが、まず経済発展を追求しますので、どうしても環境保護がなおざりになってしまいます。それが、特に農村地帯における現状であると言えます。そこで、重要な課題は、どのようにして農民に対して助言をし、今行動を取ることが重要であるということを伝えるかということです。また啓発活動、教育活動が必要であります。環境を保護することの重要性の知識をどのようにして伝達するのかということを考えるべきです。

●Victor Savage 氏

シンガポールにおいては、トップダウンシステムが用いられています。政府は1959年以降同じ政権が続いておりまして、民主主義で、選挙で選ばれたリーダーとしては、これだけの長い期間同じリーダーがあるというのは珍しいことです。5年毎に選挙があるわけですが、1959年以降、同じ政権が政府の方針を決めるという状況ですので、完全に国民は信頼しています。与党はずっと同じ党が担っているわけですが、政府は結果を出すことが出来るので信頼されていて、経済、及び社会的、そして文化的な価値を創出することが出来ます。従って、環境的な価値も必ず創出することが出来ると考えています。ご存じのようにシンガポールというのは都市中心型の国であって、大変美しい国です。排泄物、廃棄物などを的確に処理しております。発展途上国では、どうしても緑を重視するということを考えがちですが、都市部においては廃棄物をどうしたらいいのか、下水をどうしたらいいのか、ゴミ処理をどうしたらいいのか、また飲み水をどのようにして確保するのかというのが大きな問題になります。しかしながら、シンガポール政府は大変包括的な対策を練っており、街でありながら大変美しく、そして緑豊かな国でもあります。廃棄物、排泄物などの処理がうまくいっているのも、そういった意味で、シンガポールの人々は受け身になっております。全ての環境問題は、政府が対応してくれるという風に考えてしまっています。そこで、あまりにも政府に頼りきっていて、信頼し、全てとはいわないまでも、ほとんどの環境問題を解決出来ると考えてしまっています。しかしながら、そういった中で政府としましては、トップダウンではなく、ボトムアップの形で市民参加型の活動を促しています。シンガポールの人々は、なぜそれほど環境問題を重要視していないかですが、ここ20年～30年の間で、シンガポールは大変豊かになりました。1960年代の1人当たりのGNPは1000ドルでしたが、今は3万1000ドルです。そういった意味で、1人当たりの所得がこの短い間に急激に伸びたということがいえます。1000ドルだったところが3万1000ドルになったわけです。そして、QOLも上がってきております。従って、あんまり環境問題を深刻だと思っていない。さらに、我々は都市型の国であり、国というような概念がないのです。すなわち、農村地帯がない。もう、町そのものが国になっています。例えば、どこかに行きたいと思ったならば、国境を越えて、例えばマレーシアやインドネシアやタイに行かなくてはいけません。そして、本当に緑豊かな環境を楽しむわけです。今、申しましたいろいろな要素があるがゆえに、環境問

題というのは政府に頼っているということ、そして、シンガポール人がそれをどのようにとらえているのかということがお分かりいただけたと思います。

● 田中淳氏

どうもありがとうございました。司会の不手際で、時間をだいぶオーバーしてしまいました。ここで、話題提供者の方々1人ずつにコメントをと思ったのですが、どうしてもここでひとこと言いたい、という方があればお願いします。いかがでしょうか？

● 村田佳壽子氏

今こそですね、心理学的なテクノロジーというものが、科学的なテクノロジーとともに必要な時だと思います。しかしながら、まだ日本の社会では、心理学的なことが大事だということがほとんど分かっていないので、心理学者の方からアプローチをしていくということが大事だと思います。心理学はこのような働きが出来ます、このように役立ちますと。研究をするだけではなくて、役に立ちますということを、ぜひ心理学者の側からアプローチしていただけたらと、それを最後をお願いして終わらせていただきます。

● 田中淳氏

今、心理学者への期待ということが出ました。このシンポジウムの中でも、今お聞きになったように、4人の話題提供の方々から、地域、あるいは国によって、実はジレンマ、あるいはコンフリクトの構造が微妙に違うんだと。その構造を、やはりきちんと把握した上で働きかけ、教育も含めた働きかけをしていかないといけないんじゃないかという印象を持ちました。そして、指定討論者の鄭さんの話も含めて言えば、その働きかけの中で、実は地球温暖化の関心が高いということは、マスメディアが有効だというご指摘はあったわけですが、逆に言いますと、ローカルな情報生産が出来ていないということも意味しているような気がいたしました。今後の地球環境全体を考えていく上で、いくつか示唆をいただいたような気がいたします。

それでは、これで本セッションを終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

(文責：大島 尚)

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ
国際シンポジウム

今、地球を維持する哲学とは？
ーエコ・フィロソフィを求めてー

今、地球を維持する哲学とは？ ―エコ・フィロソフィを求めて―

総合討論

パネリスト：伊東俊太郎、間瀬啓允、デレアヌ フロリン、
ウィリアム・ボディフォード、竹村牧男
司会：山田利明

山 田： 時間がだいぶ押しておりますけれども、次の討論に入るために、今まで5人の先生方のご発表を、私のほうでごく簡単にサマライズさせていただきます。そして、お話の中での共通点を少し探りたいと思っております。

伊東先生は、科学の発達といった観念から自然を論じられまして、17世紀フランスの思想家デカルトとイギリスのフランシス・ベーコンを取りあげられて、デカルトの機械論的自然観、ベーコンの自然支配の理念によって近代科学技術が生まれたと位置付けられました。デカルトの、我々のいうところの心身二元論を具現化したものが、この機械論的自然観ですが、ここでいう自然は「非生命的物体である」とおっしゃっております。

また、ベーコンは自然を利用する、支配する対象として位置付け、それを利用することから、自然を単なる資源とする考え方が起こったともご説明されております。

この二つの思想によって、今日に至る科学技術が進展したわけですが、現代の環境革命の中では「人間も宇宙の生命体の一環である」といった認識が生まれている。人間と自然は同質といった考え方であって、ここから環境倫理に新しい考え方が投げられるべきであろうといった内容であったと思います。

間瀬先生のご発表は「エコ・フィロソフィ」といった概念の発生から展開を述べておられます。さらにキリスト教の立場から、人が生きるということ、宗教とはもともと自然の中にあって自然のいのちと一体となる経験から展開されてきた。「大きないのちに生かされていて、私のいのちは生きている」といった、いわば自然との「共生」の観点、自然は大きないのちです。つまり「私達は皆このいのちによって生かされている」といった考え方です。

キリスト教もまた「共生」を抜きにしては語れない。キリスト教の創造物語によれば、人は神に似せて創られているということです。したがって、人には独自性がある。しかし、人は土から生まれ、土を耕し、土に戻るものとして創られた。ここに大地との連続性があるといったご指摘でした。「スチュワードシップ」といった言葉が使われて、いわば大地への奉仕に基づく考え方ですが、こういったものがエコロジーの基になるだろうといったご指摘もございました。

この辺りは非常に重要なご指摘であったと思います。先生は今日、発表のほう

では触れられませんでしたでしたが、提出していただいておりますフルペーパーには、スピリチュアルなもの、いわゆる「霊性」に対するお考えなども書かれております。

デレアヌ・フロリン先生は、最古の仏教經典として有名な『スッタニパータ』を引用され、いわゆる「不殺生の在り方」から、その意義を明らかにされております。

ここでいう不殺生の基盤とは自身にあるということです。では、初期の仏教は、慈悲の対象としての生き物の概念をどう理解したのかといった問題について述べられています。実は植物などはその中に含まれていない、しかし植物を害することは禁止されていたといったご指摘でした。

先生は、慈悲の対象となる生きとし生けるものの対象を明らかにされておられましたけれども、慈悲の心、いわゆる慈悲の心が「エコ・フィロソフィ」に結びつく考え方であろうといったご指摘をされたと思います。

ボディフォード先生は、現代アメリカの仏教徒の考える自然観とでもいうべきお話でした。一般に欧米において、仏教は自然と深く結び付いた宗教と考えられており、そして、その原因は芸術運動としてのロマン主義、日本では「ローマン主義」と伸ばして言うのですが、このロマン主義によって神秘的な体験としての仏教が称揚されてきたといったお話でした。

いくつかの実例を示されて、アメリカ仏教の中での、いわば地球への帰依の儀式なども明らかにしていただいております。

先ほどのお話では触れられておりませんでしたけれども、ヘンリ・デイヴィッド・ソローを発表で話されておりました。この人は 19 世紀のアメリカを代表する作家です。間瀬先生も少しそのことについて触れておられますが、このソローにはボストン郊外、といっても少し距離があるのですが、ウォールデンという土地がありまして、このウォールデンの森での瞑想生活を作品にした非常に有名な『ウォールデン』という作品がございます。これなどでやはり「自然との一体化」といったことを論じられておられます。

それから、竹村先生は「人間としての生き方そのものの中にエコロジーを見出す」といった視点であったかと思います。仏教の持つ自然に対するアニミズム的要素と言ってよろしいのでしょうか、どうでしょうか？ そのようなところを少しお出しになったのか、あるいは日本仏教の持つ自然観、自然と人間との関係をご説明されたかと思います。

天台宗の「草木国土、悉皆成仏」といった思想です。これは非常に有名な言葉として伝えられてきておりますけれども、こうした思想あるいは空海の思想、山岳仏教の信仰といったことに触れられ「心身と自然は一体である」といった仏教の世界観を提示されたわけです。これをいわば「共生の原理」とすべきではないかといったご提言であったかと思います。

私なりに少しサマライズしてみたわけで、少し間違ったところもあるかもしれませんが、だいたいの要約は取れたのではないかと考えております。

実は5人の先生方に共通する部分がいくつかございます。こういった部分で共通するかと申しますと、どの先生方も「人間と自然は一体である」といったことについて、かなり強くおっしゃっておられました。心身二元論的な自然観ではなく、むしろ一元論的自然観に基づいてパラダイムの転換を図るといったことになるかもしれません。少しその辺りのことを最初の話題としたいと思っております。

それで、もうほとんど時間がありませんが、5人の先生方に1人ずつ3分ぐらいで、先生方の専門の分野から「自然と人間の一体性」ということについて、もう少し具体的にお話しいただくか、あるいはもう少し広く例を取ってお話しいただくか、どちらでも構いませんので、少しその辺に話題を提供していただきたいと思います。

それでは伊東先生から、よろしいでしょうか。

伊 東： どうもご丁寧な紹介、ありがとうございます。私の申しあげたことは、今の要約にあった通りだと思います。そして、強調したい点は宇宙も生きている。そして銀河系、その中にできた太陽系、地球も生きている。そして人間にまで、ずっと生物の進化を通して現在、我々があって、そしていろいろな環境世界と問題を起こしている。ですから、人間と自然の一体性といったことを、宇宙史の観点からもう一度、見直してみようということなのです。

このごろ宇宙論が非常に盛んになってきてまして、スモーリンの「コスモスの生命」とか、あるいはスチュアート・カウフマンの「自己組織系」の問題とか、そういった宇宙論が最近非常に盛んで、私はむしろそういったものをずっと読んでいたのです。日本のこともあまり意識しなかったし、仏教のこともそれほど意識したわけではありません。

ところが今日、竹村先生の話聞いていて「あ、僕の考えはまさに日本思想そのものなのだな」といった感じを持ちました。特に道元などはぴったりです。「その通りだ」と思いました。空海は少し難しいですね、難しくても「確かにそうだな」と思いました。

ところが、私は始めから日本思想を目掛けたのではないですから、私の考え方は割に普遍的なのではないかと、ヨーロッパの思想をやりながら、そう考えました。今までのヨーロッパがおかしかった。デカルト、バイコンがおかしかったのです。これは人間と自然とを対立させて、自然を人間にとって異質なものとして「支配しよう」とか「機械論化しよう」とかいったものです。これを根本的に改めなければいけないということです。今、皆さんがそういったことをいろいろな面からおっしゃった通りです。ただ、キリスト教の問題については、私は多少問題があると思いますが、それは間瀬先生のお話を聞いてからにしましょう。

根本的に賛成ですが、バイコンはやはりキリスト教に基づいて、あのようなことを言い出しているのです。それから、リン・ホワイトは「エコロジカルな危機」というものはキリスト教が生んだ」と言ったのです。これはもちろん反論もたくさんあって、今日の間瀬先生の反論は見事でした。ですから、私はそちらの肩を持ちます。(笑) 持ちますが、一方において、全然そのことに触れなかったと

いうのは少しどうかと思いました。「キリスト教の中にもこういったこともあるけれども、それは間違えているのだ」といえますが、やはりもう一つのオルタナティブをはっきり示すのがよかったかと思います。間瀬先生は私に先程、個人的に「少数派だ」とおっしゃいました。でも、その少数派が重要なのです。ですから、その点も私はお聞きしたいです。

山 田： はい。それでは間瀬先生がちょうど順番ですので、そこを含めましてお話してください。

間 瀬： 私は振り返って議論するよりも先に向かって議論するタイプの人間で、少数派なのです。エコロジカルな危機の根源として議論されたキリスト教は、今ではもう古いキリスト教です。人間中心的に自然を理解して、自然は資源の供給源だ、人間は物質的な幸せのためにその資源をどんどん搾取していけばいいのだ、といった理念的なものがキリスト教の中にはあるといった議論は、今ではもう古い時代の、古いキリスト教理解です。

私たちは新しい時代の、新しい生き方を目指しているのですから、そういう古いキリスト教はもう捨て去ればいいのです。(笑)

伊 東： なるほど、それではっきりしました。

間 瀬： 伊東先生からペイコン、デカルトの自然観の話が出されましたが、これは要するに近代科学の形而上学的な基盤としての、いわゆる機械論的な自然観のお話ですね。西洋近代ではペイコン、デカルトの考えが主流を占めていたわけですが、主流には必ず亜流というものが付いてまわります。その亜流というのが有機体論的な自然観でした。有機体としての自然は様々な関係の中でできあがっている。いのちの結び付き、つながり、かかわりの中で自然は生きている。だから、自然には色彩がある、嗅げば匂いがある、風情がある。つまり自然は生きた自然だ、という考えです。こういう考えに立つと、ペイコン、デカルト流の自然理解では生きた自然の姿がとらえられていないということになります。そういう批判がペイコン、デカルト時代の傍系としてあったわけです。「ならば、伊東先生、どうしてそういう傍流の思想を出さなかったのか」と反論して、私に「キリスト教のこのような点を出さなかったのはけしからん」とおっしゃるならば、私も「伊東先生、けしからん」と切り返したいわけです。(笑)

それはそれとして、要するに自然は有機体論的な、つまり生きた自然なのだというを私は言いたいわけです。伊東先生は「ガイア」を出されましたが、ガイアはギリシア神話に出て来る地母神で、この見方からすると、自然観の新たな見直しができるということにも先生は触れられました。これは重要なご指摘で、自然は巨大な機械のようなものではなく、ガイア、地母神のようなものであり、自然は生きている、そして私たちも生きている。だから、生きているもの同士の共生が成り立つ、ということになります。

そこで「私が生きているいのちの根源、根拠はいったい何だろうか」と素朴に問うとします。そうすると、出番が来るのが宗教です。宗教では「仏のいのち」とか、「神のいのち」とか、「神仏のいのちに生かされて生きている」という表現

が好んで使われます。

こういう表現はいかにも理念的にすぎるのですが、実際に、この「私」が納得するためには、宗教では「行」を実践します。聖地巡礼といった、巡礼の「行」から、「自分のいのちの根源は何なのだろうか」「仏のいのち、神のいのちと言っているものは何なのだろうか」といった問いの答が見えてきます。

私が間接的に関わったキリスト教の巡礼のことには今日は触れませんでした。山田先生からも「触れなかった」というご指摘がありましたが、この巡礼のことは資料の39ページに書いてありますからご覧ください。

例えばキリスト教にはキリスト教の巡礼があります。巡礼といっても特にカトリックでは聖地巡礼がありますが、プロテスタントにはそういう伝統はありません。けれども、プロテスタントのキリスト者も巡礼の真似事をいたします。古い修道院を訪ねるとか、廃墟になった礼拝堂を訪ねるとか、そのように訪ね歩く中で「自分の生きているいのちのルーツは神にある」「私の生きているいのちは神の中であって生き、動き、かつ存在している」と実感します。巡礼の途上でこういったことを実体験していくわけです。

神のいのちのことを、キリスト教では、大文字のLで「Life」と書き、私たちが生きている「いのち」は小文字で「life」と書きます。この大文字で書くほうの「Life」の中で、私たちの「life」は生かされて「生き、動き、かつ存在している」と納得するのは。こういういのちの理解のしかたはパンセイズムだと言われるかもしれませんが、私はパンセイズムとは言わずに、「パン・エン・セイズム」と言ったほうがより適切ではないかと考えています。これは少々専門的な議論になりますが…。

山 田： はい、どうもありがとうございます。それではデレアヌ先生、お願いいたします。

デレアヌ： インド仏教でも特に初期ですが、アビダルマ仏教とは初期仏教の延長線であり、その哲学的な体系を指しているものです。これはその「慈悲のこころ」あるいは「不殺生」の精神を貫いておりますけれども、実は自然と一体化することには、むしろそれに対しては批判的であるということを、歴史的にはっきり言わなければなりません。

ごく簡単に言うと、自然とは別に究極の善ではありません。初期仏教の理想はその自然、世界、この輪廻の世界を超えることです。つまり「解脱」です。自然に対する描写は全部善きものかという、そうでもありません。「自然はひどいものである」「動物達はお互いに殺し合って、自然の中に一瞬たりとも安心できない」とも書いてあります。

ですから、人間、自然に生きとし生けるもの、生きるということは、苦をもたらしている、苦に満ちている。唯一究極の安穩の地とは涅槃（ねはん）の地です。涅槃とはいろいろな解釈があるのですが、この輪廻世界の外にある、あるいは少なくともこころの在り方として、輪廻世界を超えたところにあります。

そういった意味では、自然観と一体ということではありませんけれども、一方

では人間に生まれたことをありがたく思う。これは非常に重要である。人間に生まれたということは、修行する場があるということです。その修行する場は、いろいろな生き物を友にすることです。そのような意味において感謝を持って、なるべく慈しみを持って、他の生き物のじゃまをせず、危害を加えず、自分の修行をすることです。

これはあくまでも初期仏教はアビダルマについての話であって、言葉はあまり良くありませんが小乗仏教の立場で、大乘仏教、さらに密教になりますと考えがずいぶん違ってきます。

例えば一つの例だけ申しあげますと瑜伽行派、これは東アジアでは法相宗にあたるのですが、その中には自分のパーソナリティを全宇宙的に拡大する瞑想法があります。それは自分自身、一個体ではなく、生きとし生けるもの全てを含めているといった瞑想法、修行法、特に慈悲の心を実際に生きている感覚として養えるといった意味です。さらに大乘仏教あるいは密教になりますと、先ほどの竹村先生のご発表にありましたような類似点がよく見られますので、また別のスピリチュアルな世界です。初期については先ほど申しあげた通りです。

山 田： はい、どうもありがとうございます。ボディフォード先生、いかがでしょうか。

ボディフォード： 私がこのシンポジウムに参加する前「エコ・フィロソフィ」という言葉を聞いたことはありませんでした。どのようなことか考えてみると、やはり新しい哲学だろうと思います。その新しい哲学によって私達の世界観、価値観、生活が変わるはずではないかと思っています。ただ、北アメリカの禅センターで修行する人々は、考え方を変える前に毎日の生活の中で経験できるものを変えなければならないと言われています。

ですから、私が説明した例は珍しいかもしれませんが、我々も生活の中で毎日、何か小さなものでも変えれば、考え方もだんだん変わってくる。哲学も変わるようになるだろうと思われます。

山 田： はい、どうもありがとうございます。それでは竹村先生。

竹 村： 山田先生から「自然との一体化を一つのキーワードとして、それぞれコメントをください」ということだったと思いますが、仏教では、実は昔から心身の個体と国土、環境世界をセットとして見ていくといった視点があります。それを基に日本仏教の「草木国土」、あるいは密教の世界観も展開しています。

そこではいわば「心身と国土の全体が自己である」といった見方、考え方が現れていると思うのですが、「一体化」というときに心身が自然に埋没してしまうとか、何か山水と一つになってしまうとか、悟り体験の中ではそういった局面もあるかもしれませんが、それが重要ということではないと思います。

自分が自分という小さな殻に閉じこもっていない。あるいは五尺のからだどころが自分だけだということではなく、本当の自分とは、実は環境との交渉の中にある総体、全体であるという視点が開ける。そのことが重要で、やはりかけがえのない主体というものが消えては問題である。単なる神秘主義に他ならないということになってしまいます。

キリスト教のほうでは「スチュワードシップ」ということが盛んに言われているということですが、やはり仏教の中からもそういった現代の危機に対して主体的に取り組んでいく、そのかけがいのない主体を打ちだしていく、そのことを忘れてはならないだろうと思います。一体といえば一体なのですが、一体であるがゆえに病んでいる環境に働きかけていく力強い主体をどう打ち出していくか。これがむしろ課題になっていることではないかと思います。

それから、私は非常に根本的、根源的なところからアプローチしようといったスタンスがあるのですが、それを見事に代弁してくださっているのが資料の 61 ページです。下のほうに「社会理論・実践に欠ける……」といった段落で、3 行行ったところで龍谷大学の谷本光男先生が書かれたものです。

「環境問題で問われているのは、われわれの「自己」のあり方であるというネスの指摘は正しいように思われる。おそらく環境倫理学のように新しい規範を持ち出すだけでは、われわれが環境を守る行動を取るうえで不十分だと思われるからである。いったいわれわれは何者なのか、自然の一部であるわれわれとは何者なのか、環境が守れない「自己」とは一体何者なのか、そういう問いを自らに問うことが必要なのではないだろうか」。

「環境問題においては、いかなる経済システムを構築するか、合意形成の仕方としてどのようなものがありうるのか、どのような規範に基づいて行為すべきかといったことは、もちろん全て重要な問題であるが、それら以上に何よりも「自己」の在り方が問われているように思われるのである」と書いておられます。

この言葉を読んで非常に心強く思いまして「エコ・フィロソフィ」というものを考えていくときに、ここから考えていくべきではないかと思いました。今後もそうやって少しずつ考えていきたいと思っています。

山 田： どうもありがとうございました。ここで、私は中国哲学が専門ですので、私の専門に強引に結びつけて、少し結論めいたことをお話しできればと思っております。

実は、特に私は中国宗教、道教を専門としておりますけれども、やはり中国の思想の中にも「人体と自然を一体のものとして見なす」といった思想がございます。

これは『内経図』という 12～13 世紀にできた人間の人体図ですが、ご覧になって分かるように、人間のからだそのものが山水です。山や川そのものによって造られています。これについては IR3S から出ております『サステナ』という雑誌に紹介させていただいたことがあるのですが、こういった山水との一体感というか、あるいは「人間のからだは自然そのものである」という考え方があります。

これは先ほどデレアヌ先生がおっしゃったヨガです。瞑想として、人体を瞑想するときにこういった山水として瞑想するといった、これも道教のひとつの技法です。このようなものがあります。

このように見てまいりますと、実は人間こそ自然そのものであって、自然の一部です。「我々が自然を破壊するということは、それ自身が自分自身を破壊するこ

とに他ならないのだ」といった考え方は、我々は立派に通用する考え方だと考えております。この辺りを一つ、今日の結論というか意見として、まとめとして提示しておきたいと思います。

本日は、長い時間にわたって大変ありがとうございました。先生方も長時間にわたってご協力いただき、ありがとうございます。これで、このパネルを一応終了させていただきます。

フロアからで 2～3 人の方から質問はということですが、ございますか。少しお待ちください。では、ご質問というよりも、ご意見だけ少しお聞かせいただくということにさせていただきます。それでは、どうぞ。

Q 1: では、時間もないようなので、さっとさせていただきます。少し皮肉めいた質問になるので申しわけありませんが、二つほどあります。

環境問題に関して言えば、よく「地球の危機だ」「地球が危ない」「地球を大切にしていこう」といったことをいろいろと言われますが、よくよく地球の歴史を考えてみると 45 億年から始まって、最初のころは火山活動でたいへんだった。オゾン層もなかった。それから氷河期も経験してきた。地質学的にはそのような地球の歴史があるわけです。

ですから、ここにきて例えば少しぐらい温度が上がろうが、オゾン層がなくなろうが、そういったことは地球にとっては大したことはない。

変なことを言いますが、これを「地球が大切だ」「地球がかわいそうだ」ということは、ひいては「人間が大切なのだ」「人間がかわいそうなのだ」ということだと思うのです。「人間が大切だ」「人間がかわいそうだ」ということを言わずに、ただ偽善的に「地球を大切にしよう」という言い方が、私は非常に違和感があるのです。

「なぜ、そこで素直に言えないのかな」といったことで、少しそこをどのように考えたらいいかというのが一つの質問です。

もう一つは、仏教学者の先生もいらっしゃるのですが、少し手短に言いますが「無常」という考え方があります。「常ならざるものはない」「ずっとあらゆるものが変化するのだ」ということで、これは「ああ、そうかな」と思うのですが、ただ一つだけ変化しないものがある。それはまさにこの「無常だ」「世のあらゆるものは変化しない」といった真理は、ずっと変わらないのではないかということです。この矛盾をどのように考えたらいいかというのが二つ目の質問です。二つ目は、少し環境問題とずれるかもしれませんが、もしお答え願えればお願いします。

山 田: 最初の質問ですけれども、先ほど申しましたように「自然そのものが自分自身である」「人間自身である」というふうに考えることによって、解決できるのではないかと思います。

それから「無常」ということについては、どうでしょうか。

竹 村: 仏教では、有為法と無為法を分けていくのです。有為法は無常。諸行は無常なのです。ですが、やはり真理は変わらない。その真理とは別に実態的に何か、物質的、個体的にあるということではないのですが、やはり変わらない面と変わる

面を両方見ているのです。

だから、諸行無常だけが真理ということにはならない。仏教でもならないと私は思います。

山 田： そんなところにしておきましょう。それではもう 1 人だけ。

Q 2： 私も「サステナビリティ」東大の TIGS のメンバー、特任研究員になっています。身体運動科学という体育の先生でもあるのですが、仏教の「行」、からだを動かすこと、あるいは姿勢を取ることが非常に重要だということを、できれば生命科学できちんと証明したいと今、研究と教育をやっている者です。

皆様の今日のお話を聞いていたら、やはりこれは科学になると私は思っておりまして、できればきちんと科学につなげたいのです。昔の伝統的な考え方、行い、実際に「行」を生み出してきているのが人間だと思うのです。それをやはり教育の中に入れてたい。今はほとんど教育の中に入っていない。「からだ」というものが本当に抜けてしまって、情報化時代になっていると思うのですが、やはりそれをきちんと入れていきたいと思っております。また哲学、理学、工学、文学など文理を分け過ぎているのが、今の日本だと思うのですが、それをきちんと「からだ」でつなげて欲しいというのが、私からの意見というか願いでもあります。私はサステナビリティのことを「ヒューマン・サステナビリティ」と言っておりますが、こういったことを言葉で示していくということは、すごく大事だと思います。工学の言葉だけでは、私達は普通、理解できないということです。少し意見だけです。

山 田： どうもありがとうございます。「文」と「理」を伝統的に分けるということですが、そうではなく、新しい領域として我々もいろいろ考えているところがございます。よろしくご指導いただきたいと思います。大変貴重なご意見、ありがとうございました。

本当に申しわけございませんが、時間でございますので、これで終了したいと思います。先生方、どうもありがとうございました。

「エコ・フィロソフィ」研究 第2号
別冊 シンポジウム・講演会 編
Eco-Philosophy Vol. 2 -Extra

平成20年3月1日発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ
(TIEPh) 事務局 稲垣諭・畑一成

住所：東京都文京区白山5丁目28-20
6号館4F 60458 教室

TEL：03-3945-7534

Email：ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp

Homepage：http://tieph.toyo.ac.jp/

